第三　文藻

仁齋一生の學問は、道德の鼓吹にあり、詞章の如きは、蓋し其主とする所にあらざるなり、然れども文は道を傳ふるの具なるが故に「若文必不可作非言無以述志非文無以傳道學而無文猶有口而不能言」といひ、以て文を作るの要を示せり、乃ち彼れが文を作るに多少苦心せし所あるを知るべし、彼れの文章大抵正大にして氣魄光燄あり、語孟字義と童子問と、最も觀るべし、文集載する所の太極論、性善論、心學原論等の如き、壯年の作と雖も、皆一代の大文字たるを失はず、故に文章家として之れを見るも、仁齋は徂徠の下にあるものにあらず、徂徠の如く、奇僻の文字を用ひず、其單純にして自然なる處、反りて彼れに優れりと謂ふべし、日札の中に文を論じて云く、

文章は簡にして意盡きんことを欲し、冗にして理闡からんことを欲せず、

又云く、

文章は理を以て主となし、氣を以て輔となす、而して之れを飾るに詞を以てす、其要は平正穩當にあり、

又云く、

文章は意深く義高く、平正通達を以て上となし、詞多く理少く、組織紛澤するを以て劣となす、

是れ蓋し仁齋が實現せし所なり、齋藤拙堂が文話(卷一)中仁齋の文を論じて云く、

貝原益軒、伊藤仁齋、並元祿以上人、當時文章之道未開、然其集中往々有可觀者、不可不謂豪傑之士、

又云く、

仁齋之文多不成語、然有氣魄光燄、使讀者不倦、東厓之文少疵、然氣燄不及、讀之思臥、古人謂文以氣爲主、信然、

以て確論となすべし、仁齋は又詩を作ると雖も、是れ固より緒餘のみ、曾

て論じて曰く「詩吟詠性情、作之固好、不作亦無害」(童子問卷之下)と、以て其志を見るべし、然れども彼れが詩時に佳なるものなきにあらず、江都北海が日本詩史(卷之三)に云く、

概其爲人、宜不屑聲律也、而詩間有有旨趣者、殊可嘉稱、

是れ亦泛論にあらず、當時京師に邨冬嶺藤坦菴二氏あり、皆詩を能くす、仁齋之れと鼎立の狀をなせり、東涯の譚叢(卷之下)に「近來文化盛行、人懷鉛槧、就中邨冬嶺藤坦菴及家君以耆宿居洛下、其片章隻字、皆傳播人間」と云へるを以て知るべし、今左に仁齋が詩數首を抄錄して、其技倆いかんを示さん、

梅

蕭散風情似渚宮、古梅寂寞夕陽紅、一枝斜入茅檐角、疎影淺移池水東、羅洞參橫夢初斷、孤山月落興何空、早知開到十分處、自有五更狼藉風、

學問須從今日始

學問須從今日始、算前顧後莫悠々、寸苗遂作蒼々樹、原水還爲瀧々流、知識開時八荒濶、工夫熟處一毛輕、六經元自儂家物、何必區々向外求、

菫菜

菫菜開數小紫花、芳莖裹露亂參差、纖々玉手羞人見、傾筐獨歸阿母家、

飲蕉窓主人宅

向來歲月似奔流、事々相催歸白頭、老去自知入佳境、一年勝似一年秋、

卽事

青山簇々對柴門、藍水溶々遠發源、數盡歸鴉人獨立、一川風月自黃昏、

此最後の詩は名儒傳及び日本詩選に選出せり、其他佳句の誦すべきもの少しとせず、例へば、

深樹寺遙見落花徑巨通遊東山

盃酒三更後、清談一夜情中秋月

河排城闕入、天向海門開難波橋上

功名白雲飛、時月紫電掣緒方宗哲席上

一身閑處乾坤濶、萬事休時日月長即興

貪夫曰樂豈誠樂俗士所榮不是榮（和三近藤立賢韻）

の類皆詩的の趣味に乏しからず、東涯の譚叢には名聯凡そ十四を抄錄せり、閑散餘錄（卷之下）に云く、

仁齋と東涯と、性質に違あり、仁齋は一篇の文一首の詩を作りて、人に示さるゝに、その人賞嘆をなせども、あながちにその喜の色を見ず、他人いか樣に嘆美をなすと雖も、自ら心に滿たざれば、其顏色自若たり、東涯は然らず、或は文、或は詩、人見て賞すれば、自らも喜びて其色、面にあふれたりとぞ、これ仁齋は大量にして、人の毀譽に拘らず、東涯は篤實にして、人を信ずればなり、二先生共に是なり、

仁齋又和歌を作れり、別に師傳あるにあらず、唯折に觸れ、口にまかせて作れるに過ぎず、閑散餘錄（卷之下）に仁齋が歌集を論じて云く「其中に二點の歌七首あり、總計二百八十餘首にて閨怨の歌は一首もなし」と、四季の景物を歌へるもの多く、戀歌の類一もなし、仁齋にありては、さもありぬべし、時に又志を述ぶるものあり、是等は歌人の月旦いかんに拘はらず、道義の點より學者の一顧を價するに足る、今左に三首を擧げんに、

寄月述懷

世の中はたゞ一さかりはてはうし惜まれてこそ月もいるらめ、

思往事

數へてぞおどろかれぬる我れながらきのふと見るも昔しなりけり、

中庸戒愼恐懼の心をよみ侍りける

思ひとればこの身の外に道もなし身を守るこそ道を知るなれ、

其他尙ほ左の歌あり、云く、

題しらず

上の上かぎりもあらじ我よりも下の下なる人を見るべし（此歌年山紀聞卷五に見ゆ）

歲旦

君が世の長閑さを今朝おもふかな學の窓の春のはつ風（此歌椿本正人所藏古文書に見ゆ）

是等の歌、皆誦し來たりて自ら味あるを覺ゆ、今之れを考ふるに、藤原惺窩、熊澤蕃山、服部南郭、三輪執齋等皆和歌を能くせり、仁齋も亦是等と雁行するに足るものなり、

第四　學風

仁齋は訓詁を事とせず、詞章を事とせず、專ら道義を講明するを以て其任とせり、彼れ四書を註せりと雖も、其目的は此れによりて道義を明かにするにあり、徒に本文の義理を解すと云ふにあらざるなり、彼れ詩歌を作れりと雖も、雕蟲を喜んで然るにあらず、偶〻此れによりて思を述べ、興を遣るに過ぎざるなり、古學先生行狀の中に左の一節あり、云く、

其生徒を敎導するや、未だ嘗て科條を設け、督察を嚴にせず、而して其侯國に友敎し、邑里を訓化するもの、各〻其材を成し、皆人の爲めに知らる、平日學者に勸むるに、道術を明かにし、治躰に達し、有用の實材たるを以てして、空文に騖せ、記誦に流るゝことを戒む、一も字を識らざる人と雖も、之れに告ぐること、諄々反覆、唯〻其意を傷はんことを恐る、其言を聽いて、各〻得る所あり、

此れに由りて之れを觀れば、仁齋は道德を明にするを務めて迂僻に陷

らず、意義を取るを務めて字句に拘はらず、是を以て子弟を薫陶するの功を奏するを得たり、同志會筆記の中に左の一節あり、云く、

學問の品德行を上となし、識見之れに次ぎ、材力又之れに次ぎ、文章を下となす、博治は其餘事なり、若し其序を知らざれば、則ち上下顚倒、本末乖離、學問成すあること能はざるや必せり、況や其餘事を以て學問の全となさば、卑陋亦甚し、云云、

仁齋此の如く道德を以て學問の正鵠とすれども、敢て知識を輕侮するにあらず、但眞實の知識は眞實の道德あるによりて之れありとせり、中庸發揮に此意を述べて云く、

知を先んじて行を後にす、此れ固より學問の常法、易ふべからず、然れども究竟して之れを論ずれば、實德ありて後實智あり、聖人の智の若き、是れなり、故に曰く、苟も至德ならざれば、至道凝らずと、先儒或は德性を尊ぶを專にして問學を緩となす、或は問學に道くを先んじて德性を後となす、俱に一偏に失して、君子の道と謂ふべからざるなり、

仁齋此に至りて殆んど朱王二派を合一して知德一致を言はんとするに似たり、然れども其道德を主とし、實行を重んずるの一事は、彼れが學問の骨髓と謂ふも不可なきなり、贈巖崎元質序に云く、

子、學を好むか、吾れ子に學を語らん、書を讀む時も亦學、書を讀まざる時も亦學にして、後學進む、夫れ書を讀むの學たるは、人皆之れを知る、而して書を讀まざるの學たるに至りては、則ち人未だ之れを知らざるなり、苟も篤く信じ深く志し、念々學にあり、他事の爲めに勝たれざれば、則ち起居動息、應事接物、遊戲閒談、目擊跬步、みな學に進むの地にあらざるなし、故に曰く、書を讀まざる時も亦學なり、夫れ學は人倫を明かにする所以にして己れに反求するを以て要となす、所謂樞柄手に入る是れなり、

仁齋は子夏が實行さへ擧がれば「雖」曰未」學、吾必謂之學矣」とするが如く、實行を目的とせり、故に獨り讀書のみが學と云ふにあらず、讀書は唯行爲に資する所あらんが爲めなり、行爲は讀書によりて得たる者の實現

に外ならず、換言すれば、行爲は理論の應用なり、是を以て如何なる行爲も彼れにありては學にあらずといふことなし、仁齋此の如く實行を目的とするが故に深く爭論を戒めたり、云く、

德は感化の本、言は爭辨の基、故に道を識るものは德を務めて言を務めず、若し夫れ其德を務めずして、徒に言を以て人を服せんと欲するものは、惑の甚しきものなり、（同志會筆記）

又云く、

多言多動は、學者の深害、故に吾れ屢〻言ふて屢〻戒む、（同上）

彼れが芝山の痛擊に對し、毫も辨駁を試みざりしもの、蓋し之れが爲めなり、要するに、彼れは言に訥にして行に敏ならんと欲するものなり、即ち道德を實行して聖哲の蹤を追はんとするの外、復た望む所なきものなり、是故に平生の動作云爲、悉く聖哲に法らんとせり、其言に云く、

聖哲の書にあらざれば讀まず、聖哲の事にあらざれば爲さず、聖哲の訓にあらざれば道はず、聖哲の法にあらざれば、行はず、學をなすの法此の若きのみ、（同上）

彼れ曾て同志會を設けて諸生と相會し、攻究切磨、共に聖哲の域に躋らんことを期せり、時に諸生を警むる文、凡そ五則あり、云く、

（一）學者の患、最も己れを有とするにあり、己れを有とすれば、則ち毎に人の不善を見て、己れの不善を見ず、己れを忘るれば、則ち毎に人の善を見て己れの善を見ず、毎に人の不善を見れば、則ち己れに矜るの心あり、毎に人の善を見れば、則ち必ず之れを身に得んことを欲す、己れを忘るゝは、則ち聖に入るの要路、己れを有とするは、則ち邪に陷るの深坑、愼まざるべけんや、凡そ吾同盟の人、講習の間務めて相謙下し、優柔引接、畛域を存すること勿れ、門戸を爭ふこと勿れ、若し人の不善あるものを見ば、己れ之れあるが若くにして、哀矜惻怛、諷導詳款して、厭惡非笑の心を生ずること勿れ、直に人に益あるにあらず、實に己れが德、亦此れに由りて成熟す、

（二）學は日新を貴ぶ、若し今日にして昨日の若く、今年にして去年の若

くならば、則ち惟其身の羞のみにあらず、實に同盟の羞なり、若し學進まざるものあらば、衆人會議して、務めて之れが力をなさんことを要す、且つ其身に於て、感謝愉悅、當に深く同盟の規誨を佩服すべし、忿怒を生ずる勿れ、

(三)羣居終日、言、義に及ばず、尤も聖師の戒むる所、凡そ同盟の人、學問躬行を語るを除くの外、寒暄を談し、詩筆を論ず、固より禁せざる所、富貴利達、服章財器、雜藝機巧の語、皆當に禁遏すべし、若し此數を犯すものは所謂道義の交にあらず、

(四)聖門の學は、大事なり、其志を立つること大なるを欲す、道を信ずる篤きを欲す、而して之れを守るに死を以てす、他事の爲めに勝たるゝこと勿れ、俗情の爲めに纏はるゝこと勿れ、勇往向前、一日は一日より新ならんことを欲す、若し其志、功名利達にありて、聖門德業の實にあらず、詞章記誦を以て足れりとなして、道德仁義の奥にあらざるものは、此座に預ること勿れ、

(五)人の道に於ける、最も忠信を要す、諸公進見質問の間を觀るに、其孝悌忠信、仁義廉恥の說、皆其肺腑に出づるが如し、然れども未だ親に孝し、長を敬し、及び朋に交はり、人に接するの間、果して皆平日言ふ所と異ならざるや否やを知らず、若し一も此れと相違ふときは、則ち所謂忠信にあらざるなり、予の此言を發する所以のもの、實に諸公亦此れを以て某に相規切せんことを欲するなり、幸に盡言を吝むこと勿れ此れに由りて之れを觀れば、仁齋は敢て賢を挾んで人に上たらんとするが如きものにあらず、門下の諸生を以て同志朋友となし、之れを呼ぶに爾汝を以てせず、稱して諸公と云ひ、愛敬の情、至らざるなし、殊に彼れが第五則の末に、此れを以て某に相規切せんことを欲するなり」と云へるは、朋友切々偲々の意を述ぶるものなり、同志會筆記の中に言へるあり、云く、

朋友講習は、己れを忘れ、意を消し、氣を降だし、言を溫にし、誘掖奬勸、相與に道に進むを務となすにあり、今時朋友、大抵道義を講ずるを以て

名となすと雖も、實に己れを持し、賢を挾み、務めて人に上たらんと欲す、何の道義を講ずることか之れあらん、戒めざるべけんや、

仁齋が敎育家として成功したるの秘訣、實に此中に存すと謂ふべきなり、

第五　經書評論

仁齋は經書に就いて一家の見解を有し、間〻奇拔なる說を發表せり、其事たる、固より彼れが學說と密着不離の關係あるが故に今左に其要點を紹介せん、

仁齋は經書の中に於て論語を以て最上となし、孟子を以て之れに次ぐとなし、曾て其古義を著はすや、論語每卷の首に「最上至極宇宙第一」の八字を書し、以て崇重の意を表す、門生或は其甚だ聽聞を駭かすことを言ふを以て後之れを削去せり、古義の叙由に論語を論じて云く、

論語の一書は萬世道學の規矩準則なり、其言至正至當、徹上徹下、一字を增すときは餘りあり、一字を減ずるときは足らず、道此に至りて盡き、學此に至りて極まる、猶ほ天地の窮まりなく、人其中にありて其大なるを知らざるがごとし、萬世に通じて變ぜず、四海に準じて違はず、あゝ大なるかな、

又云く、

夫子以前敎法略備はると雖も、然れども學問未だ開けず、道德未だ明かならず、直に夫子に至りて、然して後、道德學問、初めて發揮し得て盡くし、萬世の學者をして、專ら仁義に由りて行くことを知らしむ、而して種々の鬼神卜筮の說、皆義理を以て之れを斷じて、道德と相混せず故に學問夫子より始まりて、斬新開闢すと謂ふて可なり、孟子、宰我子貢有若三子の語を引いて曰く、堯舜に賢れること遠しと、又曰く、生民ありてより以來、未だ孔子より盛なるはあらずと、蓋し諸子嘗て夫子に親炙することを得て、其實に群聖人に卓越することを知り、而して後詞を措くこと此の如し、愚斷じて論語を以て最上至極宇宙第一の書とするは、此れが爲めの故なり、而して漢唐以來、人皆六經の尊しとすることを知りて、論語の最も尊うして高く六經の上に出づることを知らず、或は易範を以て祖となし、或は學庸を以て先となし、論語の一書其道を明かにし、敎を立て、徹上徹下、復た餘蘊なく、他經の

比すべきにあらざること、を知らざるなり、夫子の道、終に大に天下に明かならざる所以のもの職として此れに之れ由る、云云、

仁齋は孟子の學を以て「孔門之大宗嫡派」となし、其書を論じて曰く、

孟子の書は、萬世の爲めに孔門の關鑰を啓くものなり、孔子の言は、平正明白、淺きに似て實は深く、易きに似て實は難く、渾々淪々、天に蟠り地に根ざし、其底極する所を知るなし、孟子に至りて諄々然として其嚮方を指し、其標的を示し、學者をして源委の窮まる所を知らしむ、故に性命道德、仁義禮智等の說、皆當に孟子の言を以て之れが註脚となして其義を解すべし、切に論語の字面に從つて其意趣を求むべからず、蓋し孔子の時は、猶ほ白日天に中して目あるもの能く行くがごとし、故に其人を敎ふる、只之れに告ぐるに修爲の方を以てして、復た詳に其義を解くことを待たず、孟子の時は、猶ほ暗夜に道を行き、必ず明燭を待つがごとし、故に明に其義を解し、嚮方する所を示さゞるを得ず、若し夫れ孔子の道を觀んと欲して、孟子に由らざるものは、猶ほ水を

渡るに舟楫なきがごとし、豈に能く濟るを得んや、嗚呼孟子の書は實に後世に指南夜燭なり、

尙ほ仁齋は論語と孟子と相互に表裏をなす所以を論破して左の言をなせり、云く、

孔孟の道を學ばんと欲するものは、當に二書の同じき所を知り、又其異なる所を知るべきなり、則ち孔孟の本旨に於て自ら瞭然たらん、蓋し天下尊ぶ所のもの二つ、曰く、道、曰く、敎、道とは何ぞ、仁義是れなり、敎とは何ぞ、學問是れなり、論語は專ら敎を言ふて、道其中にあり、孟子は專ら道を言ふて、敎其中にあり、其故何ぞや、曰く、道は宇宙に充滿し、古今を貫徹し、處として在らざるなく、時として然らざるなく、至れり、然れども人をして自ら能く善に趨かしむると能はず、故に聖人之れが爲めに彝倫を明かにし、仁義を倡へ、之れに詩書禮樂を敎へて、以て人をして聖たり賢たるを得せしめて、能く萬世の太平を開くは、皆敎の功なり、故に夫子は專ら敎を言ふて、而して道自ら其中にあり、孟子の時に至りては、聖遠く道湮み、異端蜂起し、各其道を道とし、能く統一することなし、故に孟子之れが爲めに、明かに仁義の兩者を揭示して、これを後世に詔ぐ、猶ほ晝夜の互に行はれ、寒暑の相代はるがごとし、偏もなく倚もなく、煥たること日星の如く、人をして迷惑する所なからしむ、七篇の內、橫說竪說、其言異なるが若くにして、一として仁義の旨にあらざるはなし、而して其所謂存養擴充、仁に居り義に由るの說、皆敎を以てして言ふ、故に孟子は專ら道を言ふて、敎其中にあり、二書の言、異なる所あるが如くにして實に用を相爲す、此れ其同じき所なり、此二書の要領、學問の標的、若し此に於て理會を缺かば、卒に孔孟の門庭を得ること得はざらん、云云、

仁齋此の如き見解を有するが故に論語と孟子とを以て本經となし、詩書易春秋を正經となす、其餘三禮三傳等を雜經となし、總べて之れを名づけて群經といひ、爲めに總序を作らんことを企圖せり、然れども總序は遂に成らざりき、大學は程子以來孔子の遺書とせるに、仁齋以て孔子

の遺書にあらずとせり、其事たる、啻に大學定本の中に詳悉せるのみならず、又別に「大學非孔子之遺書辨」を著はして、自家獨得の創見を發表せり、論じて曰く、

大學の一書、本と戴記の中にありて、譔人の姓名を詳にせず、蓋し齊魯の諸儒、詩書の二經に熟して、未だ孔孟の血脈を知らざる者の撰する所なり、

彼れ尙ほ種々なる不整合の點を擧げて之れを論證し、大學の撰者を以て告子の流となせり、且つ其言の朱子と相背馳するに及んで絕叫して曰く、「孔孟の血脈を識るに於ては、敢て自ら讓らず」と、實に氣焰萬丈當るべからざるの概あり、其朱子學派より、往々痛擊を受けたるもの、故なきにあらざるなり、室鳩巢曾て高木氏の僞學論に題して曰く、

古より邪說の道を害すること多し、然れども其誕妄麤惡忌憚するこ
となきこと、未だ今日の甚しきが若きものあらず、或は古學と稱する
ものあり、曰く、大學は孔子の遺書にあらずと、云云（後編鳩巢先生文集

卷之十六）

淺見絅齋の如きは又「辨大學非孔氏之遺書辨」一卷を著はして、仁齋が說を辨駁し、甚しきは「深く考へざるを以て朱子を議す、朱門の奴婢と雖も、亦將に口を掩ふて笑はんとす、其れ亦深く考へざるの甚しきなり」と、然れども絅齋は自然辯護的態度を取り、考證に於て仁齋に匹敵するに足らず、故に其區々の議論も多くは顧みるに足らざるなり、山崎泉亦大學辨斷一卷を著はし、仁齋が說を駁す、然れども絅齋は此れを以て私見を主張し、本意に悖違するもの多しとなし、自ら之れを批評し、批大學辨斷を作れり、此の如くにして同士打の奇觀を呈せるが如き、實に識者の一笑にだも價するに足らざるなり、

朱子は大學の經一章は孔子の言にして曾子之れを述ぶとし、其傳十章は曾子の意にして門人之れを記すとす、然るに仁齋は之れに反し、大學は曾子の傳ふる所にあらずとせり、其主要なる理由を擧ぐれば、傳の六章に「曾子曰、十目所視十手所指、其嚴乎」とあり、彼れ思へらく、若し此篇を

して果して曾子の意に出でしめば、傳十章は皆曾子の言なり、奚ぞ獨り此に於て「曾子曰」と稱せんや、此れに由りて之れを觀れば、大學を以て曾子門人の記する所とすること信ずべからず、況んや禮記の諸篇「曾子曰」と稱するもの亦多し、豈に皆曾子門人の記する所ならんやと、其論證する所未だ必ずしも正確なりと謂ふを得ずと雖も、亦其識見の頗る卓越なるものなしとせざるなり、

中庸に就いては仁齋左の如く言へり、云く

中庸又孔子の言を演繹す、其書未だ的に子思の作る所と否とを知らずと雖も、然れども其言、論語に合するを以ての故に之れを取る、

又云く、

中庸の書は、卽ち論語の衍義なり、專ら孔門の心法とするものは、非なり、

中庸は古來子思の作とせるに、仁齋之れを疑へり、然れども其孔子の言に本づくものなるは之れを認容せり、彼れ又中庸を分ちて上下二篇となし、「鬼神之爲德」以下を下篇とせり、上篇にありては喜怒愛樂等の四十七字を以て古樂經の脫簡にして中庸の本文にあらずとし、而して下篇は悉く中庸の原文にあらずとせり、就中第二十章は本と一篇の書なるに、誤りて中庸に入れり、第二十六章鬼神を論じ及び第二十四章禎祥妖孽を論ずる處、皆孔子の言にあらず、中庸の一書、漢儒の爲めに誤まらるゝもの多しとせり、然れども其他は彼れ必ずしも捨てず、論じて曰く、

鬼神妖孽を論ずるを除くの外、其言皆鑿々として論語孟子と相表裏す、蓋し洙泗の遺言なり、之れを語孟に列して大に世教に補あり、

此れに由りて之れを觀れば、仁齋は大學よりは、中庸を重んずる傾向あるものなるを知るべきなり、其他六經に就いても仁齋は一々自家の見解を叙述せり、例へば書の如きは今文を取り、朱子吳臨川、梅鷟の徒が古文の眞にあらざるを疑ふを評し、其言鑿々乎として據ることありと云へり、易の如きは、歐陽子、趙南塘と同じく、十翼を以て孔子の作る所にあらずとし、「今以論語證之非夫子之語彰々矣」と云へり、仁齋是等經書に關

する見解を朱子學全盛の時代に發表せり、其學者としての勇氣洵に好すべしとなす、然れども此れが爲めに彼れが區々たる後世の非難を免れざるは亦已むを得ざる結果と謂ふきなり、

第六　學統

仁齋は當時學界の一般に信憑せる宋明儒學の證典(authority)を打破して起り、一家獨得の見解を立てたるものなり、春臺が「所謂文王を待たずして作れるもの」とすること誠に當れり、然れども古來仁齋が學、明の吳蘇原に本づくとするの說あり、春臺が聖學問答(卷之下)に云く、

明の末に吳廷翰(吳蘇原の事)といふ者、吉齋漫錄、甕記、櫝記、などいふ書を著して、程朱の道を闢きしは、豪傑なり、日本の伊藤仁齋も、吳廷翰が書を讀みて悟を開きたりと聞けり、

玆には未だ仁齋が學、吳蘇原に本づけりとは言はざれども、殆んど學脈系統を指し示す者の如し、多田義俊が秋齋問語卷之一には分明に仁齋が學の吳蘇原及び郝京山に出づることを道破せり、云く、

古學先生語孟の考は、全く吳氏吉齋漫錄、さては郝京山の時習新智によりたるものなり、何とて此二書に本づく由はしるさず、自己の發明

の樣にかゝれ候や、

又那波魯堂の學問源流に云く、

仁齋父子の學は、明の吳廷翰の見識に本づき、却て吳廷翰の學を人には說かず、吳廷翰甕記あり、櫝記あり、隨筆あり、思ひ出たること、讀み得たることを、時々書きしるし、甕に盛り集めたるが甕記、櫝に盛り集めたるが櫝記なりと云ふ意の標題なり、其自序に見えたり、丹鉛總錄、宛委餘編の富博にもあらず、却て更に吉齋漫錄上下の卷あり、全篇經義語錄に就いて、識見を發明す、仁齋東涯の學の淵源なり、

又尾藤二洲の正學指掌に仁齋が學を論じて云く、

彼れが說は吳蘇原によれりと聞く、今吉齋漫錄等の書を看るに左もあるべし、かの蘇原が輩は、みな王陽明に迷はされ、時風に溺らされて、種々の說をなし出だせるにて、本來眞の見處あるにはあらず、云云、

此說は單に春臺等の傳ふる所を蹈襲せしに過ぎず、且つ其旨意は仁齋を非笑せんとするにあり、又其吳蘇原を以て陽明學派の人とするもの、何等の根據あるにあらず、粗漏も亦甚しと謂ふべし、太田錦城の如きも九經談（卷之一）に仁齋が學を論じて、

唯其學は半吳廷翰が吉齋漫錄に出づ、

と云へり、此の如くにして仁齋が學の吳蘇原に出づること殆んど學者間の輿論となれり、然るに近來に至り島田重禮氏は頗る從來の傳說と異れる見解を立てられたり、其事は哲學雜誌第八十八號に揭載せる「伊物二氏の學案」に詳なり、今其趣意を叙述すれば左の如し、

（一）蘇原は本然氣質の說に於ては程朱と合はざれども、其學悉く程朱に反對せしにあらず、即ち其性を說くや、往々程明道を推尊し、「論性之旨、惟明道爲至」と云へり、故に仁齋が古學を奉じて一切宋儒の說を排斥せしとは大に其趣を異にせり、

（二）蘇原は「性只是仁義禮智」といひて程朱と同じく四德を以て性に屬すとする者なり、然るに仁齋は「仁義禮智四者、皆道德之名、而非性之名、道德者徧達於天下、非一人之所私也、性者專有於己、非天下所同也、此性

與道德之辨也」といひ、又「宋儒以仁爲性、予深以爲害于道」といへり、仁義禮智の事は、儒學の第一義なるに、原頭已に同じからざる者あるなり、

(三)蘇原は大學中庸は金科玉條として之れを信奉せしも、仁齋は大學は孔氏の遺言にあらず、中庸には竄入多しといへり、古文尚書の如きも、蘇原少しく疑を容れたれども、全く後世の僞書とは斷定せず、然るに仁齋は古文を取らざるなり、

島田氏は右の差異點を擧げ、終りに論斷して「此等を參考して見ると仁齋は全く異說を襲ひしと云ふは苛酷の論と思はるゝなり」と云へり、

島田氏の言、從來の傳說を破して甚だ力あり、並河天民仁齋に學ぶと雖も、後、一家言を立て、仁齋の說を駁擊し、往々其本づく所を論ずれども、其學の吳蘇原に出づるを言はず、亦以て一證となすべきなり、又周南文集(卷之九)に「書古齋漫錄後」の文あり、其中に仁齋を辯護して云く、

向きに東都にあり、或は言ふものあり、仁齋先生學を倡ふ、本と帳中の書あり、諸弟子輩與り見ることを得ず、曰く、古齋漫錄、曰く、甕記、曰く、櫝記と、余甚だ信せず、既にして漫錄を見ることを得たり、其言鑿々として味あり、所謂理氣性命、宋學の謬誤、みな既に發揮す、實に先づ我口の嗜む所を得たるものなり、夫れ述べて作らざるは、君子の道、仁齋何ぞ珠を竊み、櫝を還すの陋あらん、苟も是れを述ぶれば、いづくんぞ其書一言も相援及せずして自ら古處するものあらんや、顧ふに、其書既に成りて後、たまたまこれを見るか、或は不幸にして見ることを得ざるものあらん、皆知るべからざるなり、是れを以て仁齋をそしるは誣なり、云云、

是れ亦仁齋の爲めに辨じ得て力ありとなす、吳蘇原の事蹟未だ詳ならず、然れども其著書等によりて之れを考ふるに、吳廷翰字は崇伯、蘇原と號す、(島田氏が蘇原を以て吳氏の字とするは誤なり)正德年間の進士なり、著書として傳はれるものは吉齋漫錄二卷、櫝記一卷、甕記一卷、是れなり、尙ほ別に湖山小稿ありと云ふ、吉齋漫錄は主として一家の學說を述ぶるもの、櫝記は易詩書

春秋等の經書を論議せるもの、甕記は史的人物を評隲せるものなり、吉齋漫錄の首に「萬曆丁亥進士男吳國寅刊」とあり、即ち其萬曆年間の刊行本なるを知る、果して然らば仁齋が古學に一變せしよりは少くも五六十年前に公にせられたる書なり、故に仁齋決して此書を手にせざりしと言ふを得ず、又其學說固より蘇原と同一ならざるも、亦甚だ相似たる處あり、例へば、

(一)蘇原は劈頭第一に「天地之初、一元氣而已矣」と喝破し、此れによりて世界解釋をなせり、然るに仁齋も亦劈頭第一に「天地之間、一元氣而已」といひ、一元氣說を主張せり、此點に於ては二氏の見解全く同じくして、共に朱の二元論に反せり、

(二)蘇原は「聖人之道、仁義中正而已矣」といひ、又「太極一也、在天爲陰陽、在人爲仁義」といひ、仁義を以て道とせり、然るに仁齋も亦仁義を以て道德となし、韓昌黎が「吾所謂道德云者、合仁與義言」といへるに同意し、「道者何、仁義是也」といひ、仁義を以て道とせり、仁義を性に屬すると屬せざるとの相違はあるも、其仁義を以て道とするの點に於ては、全く同一なりと謂ふべきなり、

(三)蘇原は「道者、以此氣之爲天地人物所由以出而言也、非有二者也、然又以其變易則謂之易、生々謂易、是也」といひ、一氣の生々する作用を道となせり、然るに仁齋も亦生々して已まざるを以て天地の道となし、得意に生々主義を說き來たれり、

(四)蘇原は「理也者、氣得其理之名」といひ、「非氣之外別有理也」といひ、理を以て氣に屬せり、即ち氣の發展して萬象を生ずるに當り、秩序井然として條理あり、是れを理となせり、然るに仁齋も亦「非有理而後生斯氣、所謂理者反是氣中之條理而已」といひ、蘇原と同じく朱子の理先氣後の說に反對せり、

(五)蘇原は「夫論道之書、以易爲宗、而言以孔子爲準友、而求之、以吾心自信者爲實」といひ、多く宋儒の說を駁して直に洙泗の淵源に溯り、超然として古學に歸するの傾向あり、然るに仁齋も亦宋儒を排斥して、古學

を唱道せり、蘇原は宋儒に於て尚ほ未だ全く捨てざるものありと雖も、其大躰の方針に於ては仁齋の先驅をなせること疑なきなり、

凡そ是等の點によりて之れを考ふれば、仁齋が蘇原に本づきたりと云ふこと必ずしも否定すべからざるに似たり、且つ傳說も仁齋が學說、悉く蘇原に出づとするにあらず、但之れに本づくとするものにて、其意は唯蘇原によりて觸發せられたり、即ち啓發せられたりとするのみ、之れに反して仁齋が曾て吉齋漫錄を手にせざりしといふこと、何により て之れを證明するを得ん、仁齋が門人中江岷山實永中理氣辨論を著はして師說を紹述す、其中吳蘇原の一元氣說を引用せり、此れに由りて之れを觀れば、仁齋は吉齋漫錄を見しに相違なきが如し、之れを要するに、反證を擧げて、仁齋が蘇原に本づかざりしと云ふことを確定すること亦難し、然れども仁齋が曾て蘇原の學說を引用せず、又絕えて吉齋漫錄の事を言はざること、是れ實に反證に代はるべき價値を有す、何故なれば、仁齋の人物性行を想見するに、他人の學說を敷衍しながら、之れを隱蔽して言はざるが如き卑劣の心術ありしと思惟するを得ざればなり、

仁齋は素行の如く自ら宋儒の短處を看破して起り、從ひて又獨創の見解を發表せしものならん、其蘇原と相似たるものあるは蓋し亦暗合のみ、仁齋自ら其古學に一轉せし來由を述べて曰く、

余十六七歲の時、朱子の四書を讀み、竊に自ら以爲く、是れ訓詁の學、聖門德行の學にあらずと、然れども家に他書なし、語錄或問、近思錄、性理大全等の書、尊信珍重、熟思體翫、積むに歲月を以てし、漸く其冒槩を得たり、二十七歲の時、太極論を著はし、二十八九歲の時、性善論を著はし、後又心學原論を著はし、備に危微精一の旨を述べ、自ら以爲く、深く其底蘊を得て、宋儒の未だ發せざる所を發すと、然れども心竊に安んせず、又之れを陽明、近溪等の書に求むるに、心に合することありと雖も、益〻安んずること能はず、或は合し、或は離れ、或は從ひ、或は違ふこと、其幾回なるを知らず、是に於て悉く語錄註脚を廢して、直に之れを孟二書に求め、寤寐以て求め、跬步以て思ひ、從容體驗、以て自ら定むるこ

とありて醇如たり、是に於て余が前きに著はす所の諸論皆孔孟と背馳して反りて佛老と相鄰ることを知る（同志會筆記）

此れに由りて之れを觀れば、彼れが語孟の二書によりて自得する所ありしこと疑なし、論語古義の綱領に、

愚、天の靈によりて千歲不傳の學を語孟二書に發明するを得たり、

と云ふも、亦此意を述べて、更に昻々焉たるものなり、又童子問（卷之中）に云く、

予や固より漢宋の舊說と異なるものあり、然れども皆積疑の至り、融釋開明、自然に之れを得て、一も思慮安排、强探力索して得るものなし、我れより之れを開發することを嫌ふてなり、

乃ち悟門自ら開けて彼れ古學に一變せしを知るべきなり、湯淺常山曰く、

仁齋は深く朱氏家の書を反覆見て悟をひらきたるものと覺ゆ、徂徠は然らず（文會雜記卷之二下）、

是れ亦仁齋が那邊より自得するに至りしかを言ふものなり、林義端亦曰く、

其學師傳によらず、直に遺經に求めて得、是故に經典を疏釋し、理氣を講論するは、皆肺腑より出づ、必ずしも先儒の說を蹈襲せず、蓋し其神會自得聖に契する所以のものは、則ち親炙せる門人と雖も傳ふること能はざるなり（古學先生碣銘行狀跋）

林景範が童子問の跋にも

先師古學先生、不由師傳、深造鄒魯之閫奧、

と云へり、

此れによりて愈、仁齋が學說の蘇原に出づるにあらざるを知るべきなり、余も亦曾て傳說を信じ居たるも、今は其非なるを信ずるものなり、閑散餘錄に已に傳說の妄謬を論じて云く、

仁齋の學脈は、甕記、櫝記、吉齋漫錄の說を竊みて、吾發明とし、一家を建てたるものなりといふ說あり、是れ妬者の言にて、大なる僞りなり、天

地一元氣の說は少し似たるやうの事あれども、全體別なることなり、かの三書は、皆理學者流の言にて仁齋の說と大に同じからず、長門の周南が文集にその事を論ずれども、全く竊めるものとせず、瑣々たる末義にも、人の非を辨駁することを專務とせるもの、近時甚だ多し、嘆すべし、憐むべし、仁齋の胸襟、人の說を竊み取れる氣象にあらず、若し萬一暗に符合することあらば、千載の子雲といふべし、

誠に然り、彼の傳說は、蓋し、仁齋と學派を異にせる者の揑造に外ならざらん、賢者を傷けんとするの心情、惡みても餘ありと謂ふべし、然るに始めて彼の傳說を信じて之れを書に筆したるは春臺なり、春臺の粗漏、忽すべからざるものあるなり、されば、こそ服天游も痛く春臺の粗漏を尤めたれ、其言に云く、

未だ嘗て見ざる所の書を、纔に外題學問の分際にて、其作者を豪傑と評するは、何としたる妄說ぞや、又仁齋これに由りて開悟せりとは、何を證として云へるや、たとひ其說の似たることありとも、見ずんばいかで之れを知らん、若し傳聞のまゝならば、かろ〳〵しく書には筆すまじきことなり、其實は何かな仁齋を毀らんとてかゝる謳說を構へ出だせるなり、(燃犀錄)

春臺が學派を異にせるに拘はらず、平生仁齋を推尊せる所より推して之れを考ふるに、彼れ自ら彼の傳說を揑造せしにはあらざるべし、但彼れが何等の批評をも加へずして當時の傳說を書きしるしたることは幾重にも彼れが過失として尤めざるを得ざるなり、

因りて又蘇原と仁齋との學說を考ふるに、島田氏の列擧せる事項の外重要の點に於て正反對をなせるものあり、蘇原は頻りに主靜無欲の說を立てゝ、道家者流の口吻をなせり、其言に云く、

聖人定之以中正仁義而主靜云云、

又云く、

主靜之靜、只以無欲言之爲當、蓋五性感動、而善惡分、萬事出者、以有欲故也、有欲則爲動、聖人定之以中正仁義而主靜、無欲故也、無欲則爲靜、蓋有

欲則雖靜亦動、無欲則雖動亦靜、

甚しきは、

蓋無欲而靜、則仁義之全體在焉、

といひ、仁義を實現するの法、唯無欲なるにありとし、遂に

仁者、天理渾然、蓋此時已到無欲境界矣、

といへり、此に至りて仁齋と緇素の相違をなせり、仁齋は欲を滅して性に復るを敎ふる復性復初の說を駁し、積極的の道德主義を立てんとすれば、なり、乃ち仁齋が學の蘇原に出でざること、愈疑なきを知るべきなり、

三島中洲は又仁齋が學を以て陽明の氣學に淵源すとせり、(學士會院雜誌第十八編之八)然れども是れ唯臆測のみ、仁齋は固より陽明近溪等の書を涉獵せりと雖も、其學を崇奉せしにあらず、當時已に仁齋を以て陽明學派とせしものありと見え、答安東省菴書に云く、「退而謂僕爲從新建之學者、甚可笑」と、又同志會筆記の中に陽明の學を非として云く、

王陽明亦以見聞學知爲意見、以良知良能爲眞知、其以眞知爲眞知似矣、然以見聞學知爲意見者、亦猶佛氏之見也、

又語孟字義(卷之上)にも陽明學の孟子の旨に戾ることを論ぜり、乃ち仁齋が學の姚江に出てざるを知るべし、仁齋一元氣を言ふも、元氣は前漢以來學者の往々言ふ所なれば、此れに由りて彼れが學統を陽明に接するは、其當を得たるものにあらざるなり、例へば、漢の律曆志に、

太極元氣、函三爲一、

といひ、又

黃鐘紀元氣之謂律、

といひ、又

太極中央元氣、故爲黃鐘、

といへり、又董仲舒の春秋繁露卷四に云く、

王正則元氣和順、風雨時、景星見、黃龍下、

又(卷十七)に云く、

布恩施惠若元氣之流皮毛腠理也、

又白虎通(卷上四)に云く、

地者元氣之所生萬物之祖也、

後漢明帝紀に云く、

事畢升靈臺望元氣吹時律觀物變、

其他枚擧に遑あらず、仁齋自ら漢儒の太極を以て一元氣とするを論じて「此れは是れ千古不傳の秘、大易の天機を露洩するものなり」といへり、(童子問卷之中、徂徠護園隨筆を著はして仁齋が學を論ずるに當りても亦「渾淪を以て是となし、精微を非となす、故に漢儒の說に循つて以て之れを一元氣といはざるを得ざるなり」(卷之一)といへり、此れに由りて之れを觀れば、仁齋が陽明と同じく氣の一元を主張すといふ唯一の理由を以て之れを姚江に淵源すといふことの不當なるを知るべきなり、又仁齋は「仁義之良心」といふことをいへども此れを以て陽明の良知と同じからずとなし、論じて曰く、「近世陽明王氏專ら良知を致すの旨を講ず、然り而して徒に良知を致すことを知りて之れを仁義に本づくることを知らず」云云と、乃ち陽明と其歸を異にするを知るべきなり、之れを要するに、仁齋は別に學統の指名すべきものあるにあらず、其主張せる所は、其獨得の見に外ならざるなり。

第七　學說

第一　叙論

仁齋は何等の師傳もなく、獨り自ら古學を創唱し、直に洙泗の淵源に溯り、跡を孔孟に接するを以て期せり、乃ち「仲尼吾師也」といひ、直ちに孔子を以て其師となせり、又「仲尼即天地也」といひ、孔子を以て天地に比し、又孔子を「最上至極宇宙第一聖人」と稱し、論語を「最上至極宇宙第一書」となせり、其詩に「道以唐虞準學從鄒魯傳」の句あるは、蓋し其志を述ぶるものなり、仁齋の學、固より道德を以て主眼とすれども、亦宇宙論に關して奇拔なる一家の新說を立てたり、是れ其學の特色の存する所と謂ふも不可なかるべし、然れども彼れの宇宙論は道德と關係なきものにあらず、反りて道德の根柢たるべきものなり、是故に彼れが宇宙論に關する新規の見解は道德上更に生面を開くの端緒となれり、一言以て之れを蔽へば、死道德を化して活道德となせり、而して其歸する所は孟子にあり、孟子によりて孔子に合するにあり、其孟子之書、論語之義疏也といひ「孟子之書、又亞論語而發明孔子之旨者也」といひ、又「學者不熟讀孟子、必不能達於論語之義、蓋論語之津筏也」といふは即ち孔子を學ばんと欲せば、當に孟子を階梯とすべきを意味するものなり、

第二　宇宙論

(一)一元氣論

仁齋は宇宙を以て一元氣とし、此一元氣を以て一大活物とし、純然たる一元論 Monismus を唱道し、宋儒(特に朱子)と根本的に其見解を異にせり、乃ち論じて曰く、

蓋し天地の間は一元氣のみ、或は陰たり、或は陽たり、兩者ひたすらに兩間に盈虛消長、往來感應して、未だ嘗て止息せず、此れ即ち天道の全體、自然の氣機、萬化此れよりして出で、品彙此れに由りて生ず、聖人の天を論ずる所以のもの、此に至りて極まる、知るべし此れより以上更に道理なく、更に去處なきことを、(語孟字義卷之上)

彼れは此の如く、一元氣を以て世界の根本主義とし、一切自然現象の解釋を試みたり、所謂太極の如きも亦此一元氣を指して言ふものとせり、(童子問卷之下)然るに彼れは一元氣を動勢的に考察して、左の如く言へり、云く、

蓋し天の活動たる所以のものは、其一元の氣あるを以てなり、一元の氣は猶ほ人の元陽あるがごとし、飲食言語視聽動作、身を終ふるまで息むことなし、正に其元陽あるが爲めなり、若し元陽一たび絶ゆれば、忽ち異物となりて、木石と異なることなし、唯天地は一大活物、物を生じて、物に生ぜられず、悠久窮りなく、人物の生死あるに比せざるなり、夫れ太虛なきときは、則ち已む、太虛あるときは、則ち斯氣なきこと能はず、斯氣や既に生ずる所もなく、亦生ぜざる所もなし、萬古獨り立ちて撫撲破れず、豈に虛無を以て之れを目くべけんや(童子問卷之中)

乃ち其見解の大に宋儒及び老佛に異なるものあるを知るべきなり、朱子は理氣の二元を立てゝ世界を解釋し、寧ろ靜止的の理を以て原本的のものとせり、仁齋は世界を靜止的に考察するを非とし、寧止的に考察するを以て異端の學とせり、其言に云く、

聖人は天地を以て活物となし、異端は天地を以て死物となす、此處一たび差へば、千里の繆あり、(同上)

彼れが此の如く天地を活物とするの見解を聖人に出づとするは、蓋し易に本づくならん、易といふことも變易の義にして、已に天地の變化等りなき事を意味し、ヘラクライトス氏の所謂「永遠の流行」eternal flux と異ならず、然るに殊に繫辭の中には、「生々之謂易」とありて、世界を一大活物の一往一來一信一屈して永遠に發展するものゝ如くに叙述しあり、然るに宋儒は靜止的の理を以て根本主義とし、寂靜に流れ易き教を開けり、換言すれば、本來の動勢的態度を一變して寂靜主義 Quietism となせり、是れ宋儒が老佛の觀念を引き入れて、儒教に嫁せしめたるの結果たるや疑なし、是を以て仁齋痛く理を說くことの非なるを喝破せり、曰く、

若し理を萬物の本原とせば、自ら流れて老佛の學に入る、聖人の旨と實に天淵なり、謹まざるべけんや、(同上)

又曰く、

聖人毎に道の字を以て言をなして、理の字に及ぶもの、甚だ罕なり、云云、理を以て主となせば必ず禪莊に歸す、蓋し道は行ふ所を以て言ふ、活字なり、理は存する所を以て言ふ、死字なり、聖人は道を見るや實、故に其理を說くや活、老氏は道を見るや虛、故に其理を說くや死、(語孟字義卷之上)

仁齋は尙ほ理を說くことは老莊より來たれることを論じ、其結果、鄒魯の本旨と相背馳せることを辨ぜり、而して彼れ自ら「有動而無靜」と唱道し、得意に活動主義を皷吹し、意氣軒昂、宋儒をして後に瞠若たらしむるの概なしとせざるなり、

(二)氣先理後說

先づ宋儒の說を擧げて仁齋の之れと異なる所以を明かにせん、宋儒は理を以て氣よりも高尙なるものとし、且つ氣に先ちて存すとせり、朱子曰く、

未だ天地あらざるの先き、畢竟是れ先づ此理あり、(語類卷一)

又曰く、

此理あり、便ち此天地あり、若し此理なければ、便ち亦天地なく、人なく物なく、都て該載なく了はる、理あり、便ち氣あり、流行して萬物を發育す、(同上)

此れによりて之れを觀れば、朱子はプラトンの觀念のごときものを理とし、理は氣に先ちてあるものとせり、即ち彼れにありては、理は先驗的(transscendental)なり、彼れ時ありては「理與氣本無先後之可言」などゝいひて、頗る此點に就いて疑惑せるが如き痕迹あるも、畢竟理先氣後の說を懷抱せるものなること、復た疑なきなり、然るに仁齋は理を說かざるにあらざるも、是れを以て單に氣中の條理に過ぎずとなし、氣先理後の說を主張せり、乃ち論じて曰く、

理ありて而して後斯氣を生ずるにあらず、所謂理とは反りて是れ氣中の條理のみ、云云、大凡そ宋儒の所謂理ありて而して後氣あり、及び未だ天地あらざるの先き、畢竟先づ此理あり等の說は、皆臆度の見にして、蛇を畫いて足を添へ、頭上に頭を安す、實に見得るものにあらざるなり（語孟字義卷之上）

又曰く、

理は本と死字、物にありて物を宰ること能はず、生物にありては、生物の理あり、死物には死物の理あり、人には人の理あり、物には物の理あり、然れども一元の氣、之れが本となりて理は氣の後にあり、故に理は以て萬化の樞紐となすに足らざるなり（童子問卷之中）

其朱子と正反對にあること、以て知るべし、仁齋が所謂理は物質の變化するに當りて其中自ら一定の秩序あるを言ふ、故に理法の如きものを意味するなり、理法は物質を離れて存するにあらず、物質の變化する所に、於て認識すべきものなれば、仁齋が理は殆んど之れに當れり、理法の外尙ほ世界の實在として寫象すべきものあり、朱子の所謂理は即ち實在の如きものなり、但彼れは實在を活動的に寫象せずして、靜止的に寫象せり、故に老佛の觀念と一致せるものあるなり、其靜止的に論ずることの是非いかんは姑く之れを置くも、其物質以上の實在を說くは哲理として必ず然るべき所なるが故に、仁齋之れを破すること能はず、何等の反證をも擧げず、單に其非なるを言へり、彼れ曰く、

萬物は五行に本づき、五行は陰陽に本づく、再び推して陰陽の然る所以に至るときは、則ち之れを理に歸せざること能はず、既に理に歸するときは、則ち自ら虛無に陷らざること能はず、所謂萬法は一に歸す、一何れの所にか歸すといふ、是れなり、此れ常識の必ず此に至りて聖人と自ら相違ふ所以なり、云云（童子問卷之中）

是れ唯聖人と相違ふといふの理由を以て排するものにて、毫も其眞理にあらざる所以を明かにするものにあらず、然れども仁齋は孔子を以て終局の理想となすものなるが故に此種の議論あるも、亦怪むに足ら

ざるなり、

(三)萬古無窮論

支那の哲學者は古來往々天地の始めを論ぜり、朱子の如きも、屢〻天地の如何にして開闢せしかを說き、又六合の形、內外あるべきことをも言へり、仁齋は總べて天地の始めを論ずるものを不經の甚しきものとなして之れを排斥し、自らは萬古無窮なることを唱道せり曰く、

夫れ四方上下を宇といひ、古往今來を宙といふ、六合の窮りなきを知るときは、則ち古今の窮りなきを知る、今日の天地は即ち萬古の天地、萬古の天地は即ち今日の天地、何ぞ始終あらん、何ぞ開闢あらん、此論以て千古の惑を破るべし、(語孟字義卷之上)

仁齋の說く所は畢竟無始無終論なり、但〻佛說の如く成住壞空を認容するものにあらず、然れども又强ひて之れを辨ずることを欲せず、乃ち、其窮際に於ては、聖人と雖も、之れを知ること能はず、況んや學者をや、故に存して之れを議せざるを妙となす、といひて、闕疑の旨意を明かにせり、

荀子曰く、「天地始まるもの、今日是れなり」と、仁齋が「今日の天地は即ち萬古の天地」といふもの、此れと其旨意を同うし、天地其物にありては、本と古今の差別あるにあらずとするものなり、

(四)生々主義

仁齋は天地を以て一大活動とし、唯〻生々化々の發展あるをのみ認容し之れに反する死々滅々の事實あるを是定せず、即ち老佛の寂靜主義と正反對をなせり、今日の語を以て之れを言へば、彼れの說く所は、積極主義にして、又頗る樂天主義に類似するの痕迹あり、兎に角消極主義若くは厭世主義と立脚點を倒逆せるものなること疑なきなり、乃ち論じて曰く、

易に曰く、「天地之大德曰生」と言ふは、生々して已まざるは、即ち天地の道なり、故に天地の道は、生ありて死なく、聚ありて散なし、死は即ち生の終り、散は即ち聚の盡くるなり、天地の道性に一なるが故なり、父祖身沒すと雖も、其精神は之れを子孫に傳へ、子孫又之れを其子孫に傳

へ生々斷えず無窮に至るときは、則ち之れを死せずと謂ふて可なり、萬物皆然り、豈に天地の道生ありて死なきにあらずや、故に生ずるものは必ず死し、聚まるものは必ず散ずと謂ふときは可なり、生あれば必ず死あり、聚あれば必ず散ありと謂ふときは不可なり、生と死と相對するが故なり、(語孟字義卷之上)

仁齋が論ずる所、未だ必ずしも正確ならず、生は積極的にあり、死は然らず、唯、生の澌盡するを謂ふのみ、死てふものが、生の如く存續せるにあらず、故に生と死と積極的に相對して言ふべきものにあらざるなり、然れども生の終りが死にして聚の盡くるが散ならば、死も散もあることはあり、生ありて死なく、聚ありて散なしと謂ふを得ざるなり、又生ずるものは必ず死し、聚まるものは必ず散ずと謂ふと生あれば、必ず死あり、聚あれば、必ず散ありと謂ふと、其義に於て異同あるにあらず、然るに彼れ後者を非として前者を是とするもの、亦糊塗の甚しきものと謂ふべし、但、彼れが父祖の精神、子孫に傳はりて絶えずとする所より之れを考ふれば、特殊のものは、死を免れざるも、全躰より之れを言へば、畢竟死てふものなくして、唯、永遠に生々發展するものなり、即ち天地を以て悠久窮りなしとし、元氣を以て擲撲破れずとするもの、蓋し此れが爲めなり、仁齋老佛の謬見に陷り、生々主義に反せるを辯じて曰く、

佛氏は空を以て道となし、老子は虛を以て道となす、佛氏以爲く、山川大地は盡く是れ幻妄と、老子は以爲く、萬物皆無に生ずと、然れども天地は萬古常に覆載し、日月は萬古常に照臨し、四時は萬古常に推遷し、山川は萬古常に峙流し、羽あるもの、毛あるもの、鱗あるもの、裸なるもの、植るもの、蔓べるもの、萬古常に此の若し、形を以て化するものは、萬古常に形を以て化し、氣を以て化するものは、萬古常に氣を以て化し、相傳へ相蒸し、生々窮りなし、何ぞ夫の所謂空虛なるものを見る所あらんや、(同上)

仁齋は又天地の間は唯、動ありて靜なく、善ありて惡なしとせり、是れ當時の學界に唱へ出だされたる一新說と見做すを得べし、其言に云く

凡そ天地の間は皆一理のみ、動ありて靜なく、善ありて惡なし、蓋し靜とは、動の止、惡とは善の變、善とは生の類、惡とは死の類、兩者相對して並び生ずるにあらず、皆生に一なるが故なり（童子問卷之中）

彼れが靜は動の止といふもの當れり、如何なる物躰と雖も、其靜なるは、之れに抵抗する障碍物あるが爲めなり、若し其障碍物を除かんか、永遠に動いて已まざるべきなり、惡は善の變といふも、面白し、惡は必ずしも積極的に見るを要せず、善の間違として消極的に見るを得べし、例へば己れを利すといふ事、必ずしも非なるにあらず、但己れを利せんが爲めに、其方法を誤まり、害を他人に及ぼすことあれば、是れを惡となすを得べし、故に動ありて靜なく、善ありて惡なしの說、未だ遽に輕侮すべからざるなり、彼れ又曰く、

蓋し天地の間、四方上下渾々淪々、充塞通徹、內なく、外なく、斯善にあらずといふことなし、故に善なるときは順、惡なるときは逆、苟も不善を以て天地の間にあるものは、猶ほ山草を以て之れを水澤の中に植え、水族を以て之れを山岡の上に留むるがごとし、則ち一日も其性を遂ぐること能はざるや必せり、夫れ人一日も不善を以て天地の間に立つあること能はざること、亦猶ほ是の如し、（語孟字義卷之上）

是れ殆んど樂天主義を道破するものゝ如く、眞にショーペンハウエル氏の萬物皆惡の觀念と黑白の相違を成せり、之れを要するに、仁齋の世界觀は健全なるものにて、又學者の顧慮すべきもの、少しとせざるなり、

第三　道德論

(一)道は卽ち仁義

儒敎の範圍いかに廣大なりと雖も、道の一字を以て之れを貫穿するを得べし、道は實に儒敎の主義本領とも謂ふべきものなり、然れども何を道と云ふやは、甚だ明瞭ならず、殊に宋儒起りて「道卽性、性卽道」といひ、「性卽理也」といひ、道性理の三者を混一してより道の意義反りて分曉を缺くの感なしとせず、此時に當りて仁齋は、道は卽ち仁義なりと喝破し、以て群儒の迷夢を攪醒せり、其言に云く、

道とは何ぞ、仁義是れなり、(童子問卷之上)

又云く、

人道の仁義あるは、猶ほ天道の陰陽あるがごとし、仁義を外にして、豈に復た道あらんや、而して仁の義を包ぬるは、猶ほ陽の陰を統ぶるがごとし、故に孔門仁を以て宗となして、義を以て輔となす、(同上卷之中)

又孔門學問の宗旨を論じて云く、

千言萬語、至りて多端なりと雖も、仁義の二字に總括せずと云ふことなし、親を親とするより之れを充てゝ朋友鄕黨所識疎薄の人に至るまで、慈愛の心周邊浹洽、底らざる所なうして、一毫殘忍忮害の念なきもの、之を仁といふ、一取舍の間より之れを充てゝ、辨別分明、苟も其義にあらざれば、之れを祿するに天下をもつてすれども、顧みざるもの、之れを義といふ、他の卓行偉績、取るべきことありと雖も、然れども少しも仁に於て闕くることあれば、則ち德とするに足らず、義に於て闕くることあれば、亦之れを稱するに足らず、智とは斯二者を知りて去らざる是れなり、禮とは斯二者を節文する是れなり、皆仁の推なり、仁義の孔孟學問の宗旨たる所以のものは、此れを以てなり、(同上)

又云く、

聖人の道は仁より大なるはなく、義より要なるはなし、云云、仁義は固より道の本躰、(語孟字義卷之下)

其他仁義は道の全躰等の語も見え、仁齋が主張甚だ明瞭にして、徂徠が禮樂を以て道とするの說と大に立脚點を異にせり、仁齋、仁義を以て道とすれども、仁を以て主となし、義は其中に包含せらるとせり、即ち其「仁の義を包ぬるは、猶ほ陽の陰を統ぶるがごとし」といひ、又、孔門仁を以て宗となして、義を以て輔となす」といふが如き、皆此意を述ぶるものなり、彼れ又曰く、

仁とは人道の大本、衆善の總要、人道の仁義あるは、猶ほ天道の陰陽あるがごときなり、(童子問卷之上)

又曰く、

仁とは德の長、學仁に至れば、衆德合湊す、云云、蓋し仁とは聖門學問の宗旨にして、仁を外にして所謂學問といふものなし、（同上）

此の如く仁は義をも含蓄し得べきものなるが故に、道は仁なりと謂ふも不可なきなり、然るに仁齋は道を以て活字となし、生々化々の妙を形容する所以なりといへり、即ち彼れにありては道は靜止的のものにあらずして、活動的のものなり、且つ彼れの所謂道は奇異なるものにもあらず、又幽玄なるものにもあらずして、各自の平生行爲する所にあり、彼れが「道は猶ほ路のごときなり、人の往來する所以なり」と云へるにより、已に道てふものは、人の常に經由せざるべからざるものを謂ふこと明かなり、尙ほ又道の人を離れて存せざるを論じて曰く、

人の外に道なく、道の外に人なし、人を以て人の道を行ふ、何の知り難く行ひ難きことか之れあらん、云云、若し夫れ人倫を外にして而して道を求めんと欲するものは、猶ほ風を捕り影を捉るがごとく、必ず得べからざるなり、故に道を知るものは必ず之れを邇きに求む、其道を以て高しとなし、遠しとなし、企て及ぶべからずとするものは、皆道の本然にあらず、自ら惑ふの致す所なり、（童子問卷之上）

又曰く、

常道は即ち是れ至道、豈に天地の間、常道を外にして而して別に所謂至道なるものあらんや、常道即ち至道なるを知らば、是れ聖學、常道の外別に所謂至道ありといふは、是れ異端、何んとなれば、天地の道、至親、至切、歸宿する所の處を論ずると、子臣弟友、日用常行の間に過ぎずして、而して若し夫れ至言妙道と稱し、渺茫恍惚、高きを極め、遠きを窮むるものは、都て空言に歸す、何んとなれば、口言ふべくして身行ふことと能はず、心思ふべくして之れを物に施すことを得ず、高うして本なく、文にして實なくんば、何の至言妙道か之れあらん、（同志會筆記）

凡そ是等道に關するの說は、皆老佛に對して立する所にして、畢竟儒教の道は人類社交の外に出てずとするものなり、然れども又時ありては道は人を離れて存するものゝ如くに論ぜり、其言に云く、

道は人あると人なきとを待たず、本來自らあるの物、天地に滿ち、人倫に徹し、時として然らざるなく、處として在らざるなし、豈に人物各〻其性の自然に循ふて而して後、之れありといふべけんや、(童子問卷之上)

然れども是れ唯道てふものゝ性よりも原本的なるを示さんが爲めに言へるに過ぎず、仁齋が眞意は決して人類社交以外に別に道ありて存すとするにあらざるなり、彼れが「外人倫而無道、外仁義而無教」(童子問卷之下)といへるを以て知るべし、彼れ又曰く、

大凡そ耳目に接り、日用に施すもの、總べて是れ道にあらずといふことなし、俗の外道なく、道の外俗なし、而して一點の俗氣と雖も、亦著け得ず、此れ是れ上達の光景、(童子問卷之中)

乃ち彼れの得道は世俗の中に於てなさるゝものにて、毫も世俗の外に出でざること明かなり、彼れ此れに由りて其道の老佛と異なることを示さんとすれども、反りて柱下氏の和光同塵、曜雲氏の煩惱即菩提と歸趣を同うするものあるは、亦一奇ならずとせんや、

(二)道德の意義

仁齋は仁義を以て道とし、「道とは何ぞ、仁義、是れなり」といへり、然れども又時ありては、「道とは何ぞ、仁なり義なり禮なり智なり」(童子問卷之上)といひ、仁義禮智を以て道とし、乃ち是れを仁義禮智の總名」とせり、然るに彼れ又德を解して「德は、仁義禮智の總名」といへり、此の如くなれば、道と德といかんして之れを區別するを得べきか、彼れ乃ち論じて曰く、

道德の二字、亦甚だ相近し、道は流行を以て言ひ、德は存する所を以て言ふ、道は自ら導く所あり、德は物を濟す所あり、(語孟字義卷之上)

此れに由りて之れを觀れば、德は內容の資質にして道は發動する作用なり、仁齋は躰用といふことを好まざれども、殆んど躰用を言ふものゝ如し、道も德も、皆仁義なり、仁義の社交上行はるゝは道にして其本來人に具はるは德なり、仁齋道と德とを仁義禮智の總名とすれども、總括すれば、仁義の二者に歸せざるを得ず、彼れ之れを辯じて曰く、

仁義の二者は實に道德の大端、萬善の總腦、智禮の二者は皆此れより

して出づ(同上)

之れを要するに、仁齋にありては、仁義は即ち道德にして、道德は即ち仁義なり、彼れが韓昌黎の「吾所謂道德云者、合仁與義言」の語を引いて己れが說に合するを以て知るべきなり、仁齋德を論じて曰く、

聖人は德を言ふて心を言はず、後儒は心を言ふて德を言はず、蓋し德は天下の至美萬善の總括(語孟字義卷之上)

宋儒が多く德を言はざること、仁齋が言ふ所の如し、試に朱子の語類を見るに、理氣心性等を說くこと最も詳にして、德に至りては之れを說くこと割合に少し、且つ德其物いかんに就いて仁齋は朱子と見解を異にするものあるが如し、朱子は德を解して「德は得なり、道を行ふて心に得るあるなり」と云へり、然るに仁齋は之れを非として論じて曰く、

若し德を以て得るの義となすときは、德は是れ脩爲を待ちて而して後あり、豈に本然の德を盡くすに足らんや(同上)

仁齋の意は若し朱子の如く德を解せば、德は本來人に存するものにあらずして、脩爲によりて獲得する所となる、是れ事實にあらず、德は本來人に存するものなりと謂ふにあり、然れども朱子も「德是得于天者」(語類卷六)と云へるを以て之れを觀れば、先天の德を認容するものなることは疑なし、仁齋己れが說を立つるに急なるが爲め、多少公平を缺く所なしとせざるなり、

(三)仁義禮智

仁齋が學によれば、道は即ち仁義にして、德も亦仁義なり、是故に道德は即ち仁義、仁義は即ち道德なること自ら明かなり、然るに仁義は總括して之れを言ふものなり、委しく之れを言へば、仁義禮智なり、仁齋之れを論じて曰く、

慈愛の德、遠近內外、充實通徹、至らざる所なき、之れを仁といふ、其當になすべき所をなして、其當になすべからざる所をなさず、之れを義といふ、尊卑上下、等威分明、少しも踰越せざる、之れを禮といふ、天下の理、曉然洞徹、疑惑する所なき、之れを智といふ、天下の善、衆しと雖も、天下

の理多しと雖も然れども仁義禮智之れが綱領たり而して萬善自ら其中に總括せずといふことなし故に聖人此四者を以て道德の本躰となし學者をして此れに由りて之れを脩めしむるなり(語孟字義卷之上)

仁齋孟子に從つて仁義禮智の義を解釋せり即ち人といふ人には皆惻隱羞惡辭讓是非の四端あり是れ本と其性の有する所にして之れを具足せざるものあるなし苟も擴めて之れを充大にするときは能く仁義禮智の德をなすものとせり換言すれば如何なる人も先天的に四端てふものを具有す此本來具有せる四端をさへ發展すれば其結果は仁義禮智となるとするものなり然れども宋儒の如く仁義禮智を以て性とすることに就いては斷々乎として反對せり其論に云く、

仁義禮智の四者は皆道德の名にして性の名に非ず道德とは徧く天下に達するを以てして言ふ一人の有する所にあらざるなり性とは專ら己れに有するを以てして言ふ天下の該ぬる所にあらざるなり、此れ性と道德との辨なり(同上)

又云く、

仁義の道德の名たること彰々たり漢唐の諸儒より宋の濂溪先生に至るまで皆仁義禮智を以て德となして未だ嘗て異議あらず伊川に至りて始めて仁義禮智を以て性の名となして性を以て理となす此れよりして學者皆仁義禮智を以て理となし性となして而して徒に其義を理會し復た力を仁義禮智の德に用ひず(同上)

此の如く仁義禮智を以て道德の名とし性の名とせざるは仁齋が主張として最も特色の存する所なり宋儒は仁義禮智を以て性の名とし性を以て理となせり然るに仁齋は之れを非とし仁義禮智を以て道德の名とせり其差別言語の上に於ては不明瞭といふにはあらざれども性と德と實際然く異なるものなりや否やに就きて疑なきこと能はず蓋し仁齋は性を以て個人的のものとし人々殊別なる性を具すとし之れに反して德は萬人共通にして普遍的價値を有するものなり德は

固より一人の主觀的に是定するのみにては未だ公共的に認容せられたるものと一致することを保せず、唯其公共的に認客せられたるものと一致するに及んで始めて其眞に德たるを疑はざるべきなり、此點より之れを言へば德は普遍的價値を有するに相違なし、仁齋が道德を以て徧く天下に達すとするもの蓋し此旨意を述ぶるものなり、然れども仁齋が性を以て個人的とするは未だ當たらず、若し性を以て氣質 Charakter とせば個人的のものにあらず、矢張萬人共通のものとして認容せらるゝなり、個人的のものにあらず、矢張萬人共通のものとして認容せらるゝ所なり、仁齋が宋儒の說と峻別せんとする所、未だ十分に透徹せりと謂ふを得ざるなり、且つ又仁齋が仁義禮智に關するの說、甚だ誤解し易きものあり、何ぞや、若し仁義禮智が性の名にあらざれば、是れ人の本性に根柢するものにあらずして、客觀的に實在するものならざるべからず即ち人を離れて自存する宇宙的のものならざるべからず、然るに彼れ曰く、

道は人あると人なきとを待たず本來自らあるの物、天地に滿ち、人倫に徹し、時として然らざるなく、處として在らざるなし、豈に人物各〻其性の自然に循ふて而して後之れありといふべけんや、(童子問卷之上)

此の如くなれば、道德は人を離れて存立すべきものなり、然るに四端は人の本來具有するものなり、是に於て奇異なる結論を生ずるなり、何ぞや是れ他なし、四端と仁義禮智とは別物なり、四端は人の本性にあり仁義禮智は然らず客觀的に實在するなり、斯く解釋し得るが故に並河天民は仁齋が仁義と四端とを分ちて二物となし、孟子の旨意に背くことを論ぜり(復二誠所先生一書 左參看せよ)仁齋果して四端と仁義とを分ちて二物とせば天民の駁する所鑿々窾に中れり、島田篁村曰く、

いかにも仁齋は道德の名にして性の名にあらずと云ふに至りては、語孟の說く所と全く背戾せり、云云、仁義禮智を以て性分に屬すると、獨り宋儒の創說にあらず、子思孟子の傳ふる所、古來の定說と云ふべきなり、然るに仁齋孟子四端の說を誤解して率强附會、自己の說を

主張するは、大なる謬見にて天民などが論駁する所頗る其當を得たりと云ふべし、(哲學雜誌第八十八號)

仁齋が四端と仁義禮智とを分ち、仁義禮智を以て性にあらずとするは天民篁村諸氏の言へる如く謬見たるに相違なし、然れども仁齋は決して仁義禮智を以て人性より發展するものにあらずとせず、童子問(卷之中)に本然の德を論じて云く、

仁義禮智是れのみ、此れ天下の同じく然る所にして人心に根ざし、風俗に存して、萬世磨滅するを得ず、此れを之れ本然の德といふ、

仁義禮智が人心に根ざすものなる以上は、假令ひ是れを性といはざるも、亦性ならずとせんや、又孟子古義(卷之二)に云く、

四端は吾心の固有にして、仁義禮智は、天下の大德なり、四端の心、微なりと雖も、然れども擴めて之れを充つれば、則ち能く仁義禮智の德を成す、云云、

即ち知るべし、仁義禮智は四端を擴充するによりて始めて成るものなるを、此の如くなれば仁齋必ずしも孟子を誤解せしにあらず、然れども四端を擴充して始めて成る所の仁義禮智は天下公共の德にして普遍的價値を有するもの、故に彼れ是れを一己の私有とせざるなり、然れども彼れ本と宋儒の性即理の說と其轍を異にせんことを欲す、(中江岷山が理氣辨論を參看せよ)故に仁義禮智を性とせず、是に於てか孟子の「仁義禮智、非由外鑠我也、我固有之也」を解釋するに當りて牽合附屬、遂に其何の謂なるを知らざるなり、乃ち論じて曰く、

孟子の意、以爲く、人必ず惻隱羞惡辭讓是非の心あり、是の四つのものは、人の性にして善なるものなり、而して仁義禮智は、天下の德にして、善の至極なるものなり、苟も性の善を以てして天下の德を行ふときは、則ち其易きや、猶ほ地を以て樹を種え、薪を以て火を燃やすがごとし、自ら窒礙する所なし、故に惻隱羞惡辭讓是非の心を擴充すれば、則ち能く仁義禮智の德を成して、四海の廣きと雖も、自ら保ち易きものあり、蓋し人の性善ならざれば、則ち仁義禮智の德を成さんと欲すれ

ども得ず、唯其れ善なり、故に能く仁義禮智の德を成すを得、故に仁義は即ち吾性といふも可なり、吾性は即ち仁義といふも亦可なり、但仁義を以て性中の名とするときは、則ち不可なり、所謂固有といふものゝ意、蓋し此の如し、其理甚だ微なり、所謂毫釐千里の差、實に此にあり、

學者反覆體察せずんばあるべからず、（語孟字義卷之上）

今此文を讀むに、四端を以て性とし、仁義禮智を以て德とし、兩者を區別するの意は、明瞭なれども、兩者が如何に區別し得らるゝやは遂に明瞭ならず、最後に仁義が性なりや否やを論ずる處、曖昧模糊、其何の謂なるを知らず、是れ全く仁齋が思想の混亂に出づるものなること疑なきなり、孟子の見解は本と單純昭晰にして、些の疑を容れず、即ち人てふ人は四端を有せざるなし、此四端をさへ擴充すれば、其結果必ず仁義禮智となる、是故に仁義禮智は人の心に根さすものなりと、是れ鄒叟の意なり、此の如くなれば毫も微妙不思議の點あるを見ず、然るに仁齋强ひて仁義を以て性にあらずとして、宋儒の說と峻別せんと欲す、是に於てか自ら五里霧中に迷ひ、殆んど譫語に類する言を吐き、「其理甚だ微なり」と云へり、其理甚だ微なるにあらず、彼れ自ら朦朧として暗中に摸捉するを知らざるのみ、

四端と仁義禮智との關係に就いては仁齋思想の混亂を免れずと雖も、彼れが仁義禮智を以て道德とすることは、當時にありては眞に破天荒の主張にして、暗夜に燈を得たるの思ありしや疑なし、然るに彼れは仁義禮智の中、仁義を以て主となし、智禮の二者は此れより出づとし、更に又進んで仁の一字、一切を包容すとせり、其言に云く、

仁とは人道の大本、衆善の總要、（童子問卷之上）

又云く、

蓋し仁とは聖門學問の宗旨にして、仁を外にして所謂學問といふものなし、（同上）

又云く、

王道固より仁義の兩者に出でずと雖も、然れども約して之を論ずれ

ば則ち一の仁の字之れを盡くせり(同上卷之中)

畢竟仁齋が學にありては仁の一字鄒魯の道德主義を表出せり然ちば仁とは如何なる事を意味するかといふに彼れは是れを以て愛の義とせり其言に云く、

仁の德たる大なり然れども一言以て之れを蔽ふ曰く愛のみ君臣にありては之れを義といひ父子には之れを親といひ夫婦には之れを別といひ兄弟には之れを敘といひ朋友には之れを信といふ皆愛より出づ故に此五のもの愛よりして出づ蓋し愛は實心に出づ故に此五のもの愛よりして出づるときは實たり愛よりして出でざるときは僞のみ故に君子は慈愛の德より大なるはなし殘忍刻薄の心より戚しきはなし孔子仁を以て德の長とするは蓋し此れが爲めなり此れ仁の聖門第一字たる所以なり(童子問卷之上)

又云く、

慈愛の心渾淪通徹內より外に及び至らざる所なく達せざる所なうして一毫殘忍刻薄の心なき正に之れを仁といふ此に存して彼れに行はれざるは仁にあらざるなり一人に施して十人に及ばざるは仁にあらざるなり瞬息に存し夢寐に通じ心愛を離れず愛心に全く打ちて一片となす正に是れ仁なり故に德は人を愛するより大なるはなく物を忮ふより不善なるはなし孔門仁を以て學問の宗旨とするは蓋し此れが爲めなり(同上)

其他仁は愛を主として德は人を愛するより大なるはなし(童子問卷之上)といひ又惟愛以て仁を成すべし(日札)といひ仁とは愛の義なることを論じて復た餘力を遺さゞるの概あり韓昌黎已に博愛を以て仁とせり然るに宋儒は仁を以て性となし愛を以て情となし昌黎を以て情を知りて性を知らずといへり仁齋乃ち宋儒に反對し寧ろ昌黎に左袒せり但昌黎は未だ鄒魯の道德主義畢竟仁に外ならずとまでは言ざりき然るに仁齋は仁を以て聖學之全體萬善之總括となし宋儒の如く仁を以て性となすことの非なるを痛論し人道的博愛 Allgemeinenenschenliebe

を以て其道德主義となせり、是故に其歸着する所は、今日の道德的觀念と相背馳する所あらざるなり、

(四)道德的格言

仁齋が道德に關する諸說中特に紹介すべきは、如上の事項に過ぎずと雖も、彼れが愼重なる考察の結果に出でたる格言にして、吾人の實行に適切なるもの少しとせず、今左に之れを選出せん、

一　多言は憎を取り、多動は謗を取り、多學は德を害ひ、多說は理を亂る、

二　己れを責めて人を責めざれば怨なし、此れ學問究竟の法、

三　書を讀むは當に沙を淘して金を拾ふが若くすべし、取ることは其廣きを欲し、擇ぶことは其精はしきを欲す、

四　學問は當に勝心を以て大戒となすべし、吾れ勝心あるものを觀るに、其言多く義理を以て糊點すと雖も、然れども皆勝心より來たりて、其害中に潛滋暗長して益〻解すべからず、學問愈〻進めば邪心愈〻長ず、議論愈〻工なれば私心愈〻深し、故に學問當に勝心を以て大戒となすべし、

五　至言は泛然たるが若く、邪說は人を動かし易し、泛然たるが若し、故に得て知るべからざるなり、人を動かし易し、故に覺〻す、自ら其窠臼に陷る、

六　若し夫れ人倫を外にして道を求めんと欲するものは、猶ほ風を捕り、影を捉ふるがごとく、必ず得べからざるなり、故に道を知るものは、必ず之れを邇きに求む、其道を以て高しとなし、遠しとなし、企て及ぶべからずとするものは、皆道の本然にあらず、自ら惑ふの致す所なり、

七

高きに居るものは卑きを見る、故に其言卑からざるを得ず、卑きに居るものは高きを視る、故に其言高からざるを得ず、自然の符なり、是故に道德盛なれば、議論卑く、道德衰ふれば、議論高し、猶ほ權衡の物を量るに、其輕重に隨つて、互に相低昂するがごとし、道德一分衰ふるときは議論一分高し、道德二分衰ふるときは、議論二分高し、道德愈〻衰ふるときは、議論愈〻高し、議論愈〻高きに及んでや、道德蔑如たり、

八

苟も風に向つて火を吹き、薪を添へて之れを助くるときは、一片の火、寸以て宮を燬くべく、一點の野火、以て原を燎くべし、其勢赫々烈々、遷延廻轉、撲滅すべからず、是れ豈に一把の薪の力ならんや、人若し志を立てゝ回らず、力め學んで倦まざるときは、以て聖となるべく、以て賢となるべし、而して以て人物の性を盡くして、天地の化育を贊くべし、

九

數の貴ぶべきこと此の如し、

儒者或は軒冕を錙銖にし、富貴を塵芥にするを以て高しとなす、世間も亦超然遐舉、人事を蔑視するを以て至れりとす、皆道を知らざるの甚しきなり、

十

卑きときは、自ら實なり、高きときは、必ず虛なり、故に學問は卑近を厭ふことなし、卑近を忽にするものは、道を識るものにあらざるなり、道は大地の如きか、天下地より卑きはなし、然れども人の蹈む所、地にあらずといふことなし、地を離れて能く立つことなし、況んや華嶽を載せて重しとせず、河海を振めて洩らさず、萬物載するときは、豈に其卑きに居るを以て之れを賤むべけんや、惟天も亦然り、人惟蒼々の天を知りて、目前皆是れ天なることを知らず、天は地の外を包み、地は天の內にあり、地より以上は皆天なり、左右前後も亦皆天なり、人兩間に圍して居る、豈に遠しといふべけんや、故に知る凡そ事皆當にこれを邇きに求むべし、遠きに求むべからず、遠きに求むるときは、則ち中らず、

學者必ず自ら其道の卑近なるを恥ぢて、敢て高論奇行をなして以て世に高ぶり、或は異を窮めて以て神となし、天を援いて以て高きをするに至る、諸子百家異端の徒特に甚し、皆實德を知らざるが故なり、苟も卑近の二字を道ふを羞ぢざるときは、則ち道進むべく、學明かなるべくして、道に違ふの遠きに至らざるなり、

十一

聖人の道は、君臣父子夫婦昆弟朋友の間にありて、德は仁義忠信の外に出でず、古今に通じて變ずる所なく、四海に準じて違ふ所なし、人心に根さし、風俗に徹して、天子も廢すること能はず、聖人も改むること能はず、

十二

苟も德行を以て本とするときは、則ち智至り道明かにして、事の是非得失了々分明、思索を待たずして、自ら能く其肯綮に中たる、若し此の如くならずして、專ら理を以て之れを斷ぜんと欲するときは、則ち其說愈長うして實を去ること愈遠し、

十三

仁者は俗を嫉むの心少なし、故に今の古に遠からざることを知る、不仁者は世を憤るの心勝つ、故に今の復た古なるべからざることを知る、心を設くること同じからず、趣向頓に異なり、後世の君子なきこと能はざること、猶ほ古の小人なきこと能はざるがごとし、豈に獨り三代以後を以て盡く人欲となすべけんや、

十四

儉と嗇と、其迹相似て、其心實は相反す、儉は善の基、嗇は欲の叢、儉にして施すことを好むものは、眞の儉なり、儉にして施すことを知らざるは、亦嗇のみ、古人儉を務むるものは、其施さんが爲めなり、儉にして施すことを知らざるは、儉といふべからず、世の鄙夫、儉に託して、夫の奢るものを詆るは、一嚮に附すべし、儉にして施すことを好むものは誠の大德の人たり、儉にして施すことを知らざるものは、眞の守錢の虜

のみ、

十五

其道愈大なれば之れを譏るもの愈衆く其德愈邵ければ之れに寇するもの愈深く憂ふる心悄々として群小に慍らる孔子だも猶ほ然り況んや其他をや、

十六

學者當に悟門の自ら開くを竢つべし我れより之れを開發する勿れ眞積み力むること久うして怡然として理順ひ渙然として氷の如く釋く之れを悟門自ら開くといふ永く己れが有となりて終身失はず蓋し實德の到る所にして專ら智見を事とするものゝ得て及ぶ所にあらず正に之れを實智といふ、

十七

凡そ事專ら理によりて斷決するときは殘忍刻薄の心勝ちて寛裕仁厚の心寡し上德非薄にして下必ず傷損し人亦心服せず須く長者の氣象ありて方に可なるべし惡を隱して善を揚げ人の美を成して人の惡を成さず躬自ら厚うして薄く人を責む是れ皆長者の氣象唯仁者のみ之れを能くす區々たる小儒の能く及ぶ所にあらざるなり、

十八

大勇あり大義ありて韜晦含藏して形跡を露はさゞるものにあらざれば興に君子の域に入るに足らず是れを學問の準的となす、

十九

高明は得やすく博學は恃むべからず唯中庸を得るを難しとす、

二十

愚者の惑は淺し猶ほ迷の遠からざるものゝごとし賢智者の迷は深し猶ほ千里の外に迷ふものゝごとし吾れ愚者の爲めに憂へずして深く賢智者の爲めに懼る、

廿一

人皆聰明の貴ふべきを知りて學を好むの功聰明に倍すること實に

萬々なるを知らず、聰明人に如かざるを患へんよりは、自ら其學を好むの志を篤うせんには如かざるなり、

廿二

凡そ人の我れを信ぜざる我れに服せざるは、皆吾誠の未だ孚あらざるなり、惟當に自ら修省すべきのみ、苟も人至當の說を以て之れを告ぐることあらんに、吾れ我說を以て之れを拒まば、是れ自ら善道に絕つなり、是れ自ら吾身を戕害するなり、

廿三

積疑の下大悟あり、大悟の下奇特なし、

廿四

仁者は人の善を見て、人の惡を見ず、不仁者は之れに反す、蓋し仁者は人の惡を見ざるにあらず、其心寬容慈愛惓々引接棄てざるの意あり、其深く惡んで遽に之れを絕つもの、亦不仁なり、

廿五

書を讀み理を窮むれば、以て知を致すべし、未だ以て行を制するに足らず、禮を脩め義を行へば、以て行を制すべし、未だ以て德を成すに足らず、以て德を成すに足るものは、其れ惟仁なるか

廿六

惟仁以て德を成すべく、惟義以て行を制すべく、惟儉以て身を保つべく、惟敬以て事を執るべし、

廿七

內に蘊する之れを德といふ、外に形はる之れを行といふ、內に蘊するもの、外に發せざる能はず、外に形はるゝもの、中に存するを以てなり、行を以て專ら外とするものは非なり、

廿八

學を好めば雜慮生せず、德を好めば外邪入らず、古人惟學を好み德を好むを知るのみ、

廿九

夫れ天爵ならして人爵至るは義にあらず、之れを受くべからざるなり、天爵ありて人爵之れに從ふは義なり、當に之れを受くべきなり、天爵ありて人爵至らざるは命なり、之れに安んずるのみ、

三十

聖人の道優々洋々、促迫するを得ず、牽強するを得ず、

三十一

文學は過ぎ易うして、德行は及び難し、古今學者の通病、今又及び難きの德行を勸勉せずして、反りて過き易きの文學を增益せんと欲す、亟ぞ火を以て火に添へ、泥を以て泥に利するに異ならん、詩に曰く、猱に木に昇ることを教ふること勿れ、塗に塗を附くるが如し、

三十二

大凡そ天下國家の治に補ひなく、人倫日用の道に裨けなきもの、皆之れを邪說暴行といふ、佛老の學、後世禪儒高遠隱微の說の若き、是れのみ、

第四　學問論

仁齋の眼中、唯、道德あるのみ、道德を以て身を立て、道德を天下に主張し道德を以て一生を貫かんとせり、故に彼れにありては、學問といへば、道德より外之れなきなり、道德を攻究し、道德を領悟し、道德を實行すること、是れ即ち彼れが學問なり、鄒魯の學問、本と道德を以て大頭腦となすが故に、忠實に鄒魯の學脈を紹がんと欲する彼れが學問、豈に他に出づべけんや、乃ち論じて曰く、

學問は道德を以て本となし、見聞を用となす（語孟字義卷之下）

然るに彼れにありては、道德は他なし、仁義禮智なり、約して之れを言へば、畢竟仁のみ、愛のみ、是故に彼れ論じて曰く、

學問は當に聖人敎を立つるの本旨いかんを識るべし、是に於て一たび差へば、必らず異端に入る、怕るべし、佛氏は專ら性を貴んで道德の最も尊しとするとを知らず、聖人は專ら道德を尊んで、心を存し性を養ふ、皆道德を以て主となす、夫れ天地に充滿し、古今に貫徹し、自ら磨

滅せざるの至理ある、此れを仁義禮智の道となす、又此れを仁義禮智の德となす、所謂道德の最も尊しとするもの是れのみ、(同上)

又曰く、

仁、義、禮、智の四字、是れ學問の全躰、智、仁、勇の三字、是れ道に進むの大關鍵、文、行、忠、信の四字、是れ孔門人を敎ふるの定法、(日札)

仁齋は此の如く仁義禮智の道德を以て學問の對象とす、尙ほ之れを省略して單に仁義といへり、曰く、

學問は仁義より貴きはなし、仁義を存するは禮より要なるはなし、(童子問卷之中)

彼れ又尙ほ之れを省略して單に仁といへり、曰く、

仁は聖門學問の宗旨にして、仁を外にして所謂學問といふものなし、(同上卷之上)

又曰く、

孔門の學は仁のみ、仁は愛のみ、蓋し仁者は愛を以て心となし、造次にも是に於てし、顚沛にも是に於てし、內より外に及ぼし、邇きより遐きに至り、應事接物、起居動息、往として是心にあらざるなし、故に孟子の曰く、仁者は其愛する所を以てして、其愛せざる所に及ぼすと、是れなり、但須らく義を以て輔となすべし、苟も仁ありて義なきときは、愛、其愛する所にあらずして、反りて愛せざる所あるを免れず、故に眞仁は必ず義あり、眞義は必ず仁あり、兩者自ら用を相爲して相無かるべからず、(同志會筆記)

仁齋唯仁のみを學問の對象とすれども、其仁といふときは、義をも含蓄して之れを言ふこと此れに由りて明かなり、然れども尙ほ推して之れを論ずれば、禮智をも含蓄すといふべし、彼れ乃ち論じて曰く、

聖人學問の第一字は、是れ仁、義を以て配となし、智を以て輔となし、禮を以て地となす、而して進修の方は、專ら忠信にあり、(日札)

仁義禮智は學問の對象なれども、之れを實行する方法としては忠信を要す、忠信が已に中に存し、運用の基とならば、仁義禮智、始めて表面的た

らざるを得るなり、彼れが、

聖門の學は、仁義を以て宗となし、而して忠信を以て主となす、（語孟字義卷之下）

といふは之れが爲めなり、又論じて曰く、

忠信は學の根本、始を成し終を成す、皆此にあり、何んとなれば學問は誠を以て本となす、誠ならざれば物なし、苟も忠信なければ、禮文中るべきと雖も、儀刑觀るべしと雖も、皆僞貌飾情、適以て奸を滋し、邪を添ふるに足る、（同上）

仁齋は學問に本体あり、修爲ありとし、仁義禮智を以て本躰とし、忠信敬恕を以て修爲とせり、本躰は實行の對象にして、修爲は對象を實行する方法なり、彼れ誠と忠信との間に微細の區別をなさんとすと雖も、亦之れを同一視せること前に引用せる文によりても知るべし、誠といひ、忠といひ、皆眞實無妄の心を指して云ふものにて、苟も之なければ僞善となる、故に彼れ之れを重んずること甚だし、乃ち誠を論じて曰く

誠は實なり、一毫の虛假なく、一毫の虛飾なし、正に是れ誠、（同上）

又曰く、

誠は道の全躰、故に聖人の學は、必ず誠を以て宗となす、而して其千言萬語、皆人をして夫の誠を盡くさしむる所以にあらずといふことなし、所謂仁義禮智、所謂孝弟忠信、皆誠を以て之れが本となす、誠ならざれば、仁、仁にあらず、義、義にあらず、禮、禮にあらず、智、智にあらず、孝弟忠信も、亦孝弟忠信たることを得ず、故に曰く、誠ならざれば物なしと、是故に誠の一字實に聖學の頭腦、學者の標的至れり、大なるかな、（同上）

又曰く、

聖人の道は誠のみ、（同上）

此の如くなれば、道德は誠にして、誠は仁義禮智よりも重し、是故に誠は實行の方法といふよりは寧ろ實行の精神といふを當れりとなす、之を要するに、仁齋にありては、學問は道德の學問にして、道德に關せざる學問は、之れを攻究するの價値なきものなり、政治の如きも道德を以て主

とすべしとし、經濟の如きも道德に害ありとなせり、乃ち論じて曰く、

古より治道を論ずるもの、或は以爲く、智巧材力を以て之れを致すべしと、或は以爲く、良法善政を以て之れを致すべしと、皆淺近の言、深く論ずるに足らず、夫れ政は德を以て本となし、識を以て補となす、要するに、材力智巧を以て之れを致すべきにあらざるなり、苟も有德の士、經術に深きものにあらざれば、識ること能はず（同志會筆記）

是れプラトンアリストテレス等の如き希臘の哲學者と同じく、道德政治の一致を期するものなり、道德の如何なる階級の人にもなかるべからざるは、言ふまでもなけれども、唯、道德さへあれば、政治は容易になし得べしとするは、謬見の甚しきものにて、今日にありては、固より辯論を費やすを要せざるなり、殊に古學派より一の有力なる政治家をも出ださゞりしといふことを考察せば、何人も仁齋が言の事實に副はざるを領悟せん、彼れ又曰く、

學者幾に經濟に志あらば、流れて制度文爲の學となる、幾に事功に志あらば、流れて權謀揣摩の術となる、而して道德の本原に於て反りて迂濶を以て之れを名づく、蓋し小利を見て速ならんことを欲するが爲めの故なり、（同上）

仁齋此に至りて益、道德を過重せり、經濟といひ、事功といひ、亦社會の發展に必要なるものなり、道德を過重するの極、是等の事を賤視するに至るは、中正を持するの論といふべからざるなり、

詩を作り文を作ることは、仁齋必らずしも非とせず、殊に文は作らざるべからずといへり、彼れ論じて曰く、

詩は性情を吟詠す、之れを作る、固より好し、作らざるも亦害なし、云云、詩は藝中の雅翫なりと雖も、然れども甚だ嗜むときは、必ず害あり、（童子問卷之下）

此論當れり、彼れ又曰く、

詩は以て志を言ふ、文は以て道を明かにす、其用同じからず、詩は之れを作る、固より可なり、作らざるも亦害なし、文の若きは必ず作らずん

ばあるべからず言にあらざれば以て志を述ぶることなし文にあらざれば以て道を傳ふることなし學んで文なきは猶ほ口ありて言ふこと能はざるがごとし然れども文の律に入る亦難し(同上)

彼れが此の如く文の必要を認容したるは大に好し詩は天賦の才なければ作らざるを可とす文に至りては然らず美文を作るの才なしとするも達意の文何人にも必要なしとせず況んや學者をや

仁齋が學問に關する見解中殊に吾人の注目を惹くに足るものは彼れが活法を以て活物を治むとせしことなり其言に云く、

夫れ心は活物なり學は活法なり活物を以て活法を治む宜しく草木を養ふが如く灌漑培植を務めて摧折屈撓して以て其生氣を劉喪遏絶すべからざるべし(同上)

又其意を叙述して云く、

學問は須らく活道理を看んことを要すべし死道理を守着せんことを要せず枯草陳根金石陶瓦の器之れを死物といふ其一定して增減なきを以てなり人は然らず進まざれば退く退かざれば必ず進む一息の停るなし死物の若く然ることを能はず故に君子は過なきことを貴ばずして能く改むるを以て貴しとなす(同上)

彼れが死學問を打破して活學問を鼓吹する處活氣炎々として人を根柢より清新にし更に之れを鞭撻し驅りて道に進ましむるの力あり殊に最後に「君子は過なきことを貴ばずして能く改むるを以て貴しとなす」といへるが如き謹んで傾聽するに足る若し些の過失をもなさざらんと欲せば積極的に發展せんよりは寧ろ退いて一己を全うするに若かず然れども是れ自ら死物視するなり活學問は之れに異なり積極的に活動し永遠に發展せんことを期す故に殆んど今の所謂自我實現說に異ならず固より人は必ずしも過失なきを必せず然れども是れ意に介するに足らず唯之れを改むべきのみ換言すれば己れにある弱點を除去することに汲々たらんよりは己れにある長處を發展して進めよといふものなり是れ宋儒の復性說と正反對をなし甚だ痛快なる見解

なりとなす、彼れ又論じて曰く、

宋の慶元諸老の學の若きは、銖々にして量り、寸々にして挍べ、把捉矜持、一毫も人の指摘を容るゝことなからんと欲す、故に其德、緊急嚴勵にして、寬裕溫柔の氣象を見ず、此れを之れ死道理を見て、活道理を見ずといふ、云云、君子は終日乾々、夕までに惕若たり、戰々兢々、深淵に臨むが如く、薄氷を履むが如しと、然れども其心は綽々然として餘裕あり、故に聖人の言は泛然たるが如くにして、意實に到る、活道理を見るが故なり、(同上)

仁齋活學問を主張する處よりして、識見の尙ふべきことを論じ、世の隨手濫讀、歸する所なきものを警むること切なり、其言に云く、

識見を要となす、書を讀んで識見なきは、猶ほ讀まざるがごときなり、苟も識見を得んことを要せば、當に其歸宿する所を尋ぬべし、徒に涉獵すること勿れ、須らく外にある者の家に歸ることを求むるが如くすべし、迷子の道路を行くが如くすべからず、外にある者の家に歸るや、迂途に由らず、外事を省みず、一步は一步より急に、一行は一行より速かなり、凡そ囊橐資糧、途中かくべからざるの具を携へて、一箇も無用の長物をもたらさず、書を讀むものも、亦須らく歸計をなすが如くすべし、先づ其有用無用を辨じ、其學術政躰に關し、己れを修め人を治むるの切要なるものを取りて、其泛然切ならず、實用に益なきものは之れを闕いて可なり、古人の書、議論聞くべくして、之れを實用に施すべからざるものあり、或は古に宜しくして、今に宜しからざるものあり、或は彼れに宜しくして、此れに宜しからざるものあり、一々躰察せんことを要す、放過すべからず、此の如く工夫を用ふるときは、一卷の書を讀めば、斯一卷、便ち己れが用となり、十卷の書を讀めば、斯十卷、便ち己れが用となる、乃ち數百千卷に至りても皆然り、迷子の途にあるや、東西を識らず、南北を分たず、面に從ひ脚にまかせ、行き行いて已まず、茫然として立ち、偃然として憩ひ、卒に其家の何れの處にありといふことを知らず、今の書を讀むもの、有用無用を辨せず、多を貪り靡を

闘はし、僻書奇編、秘記奥牒に至るまで、索搜遺すことなからんとを欲す、數行俱に下だり、積むに數寸を以てするの捷ありと雖も、其成る所を顧みるに、卒に無識見の人たり、云云、今の書を讀むもの、奚を以てか迷子の道路を行くに異ならん、噫、(同上)

是等の論、今日の學者の通病に適中せりといふべし、仁齋は又黨同伐異の弊を打擊し、他山の石、以て玉を攻むべしの旨意を叙述せり、其言に云く、

己れと議論同じきを悅んで、己れが意見と異なるものを樂まざるは、學者の通患なり、學問は切磋琢磨を貴ぶ、己れが意見と異なるものに從ひ、己れを舍て、心を平かにし、切劘講磨するに若くはなし、所謂人に取ること、を樂しむといふ是れなり、(童子問卷之中)

彼れが襟度の宏量、以て知るべし、彼れ又師門の敎を尊ぶは可なりとするも、師門を私するは不可なりとし、古來往々此弊あるを論じ、朝鮮の李退溪が其著書中に楊子直を朱子の叛徒とせるを陋見なりとして之れを非議し、往くものは追はず、來たるものは拒まざるは、古の道なり、と論ぜり、仁齋又學問の法に血脉を辿ると意味を探るとの二樣あることを論じ、頗る得意なるが如し、其言に云く、

學問の法、予岐して二となす、曰く、血脉、曰く、意味、血脉とは、聖賢道統の旨をいふ、孟子の所謂仁義の說の若き是れなり、意味とは、即ち聖賢の書中の意味、是れなり、蓋し意味は本と血脉の中より來たる、故に學者當に先づ血脉を理會すべし、若し血脉を理會せざれば、則ち猶ほ缸の枵なく、宵の燭なきがごとく、茫乎として其底止する所を知らず、然れども先後を論ずるときは、則ち血脉を先きとなす、難易を論ずるときは、意味を難しとなす、何んとなれば、血脉は猶ほ一條路のごとし、既に其路程を得るときは、則ち千萬里の遠きも、亦此れよりして至るべし、意味の若きは、則ち廣大周偏、平易從容、具眼者にあらざるよりは、識ることを得ず、予嘗て謂ふ、語孟の二書を讀むに、其法自ら同じからず、孟子を讀むものは、當に先づ其意味を知るべし、而して血脉自ら其中に

ありと(語孟字義卷之下)

仁齋が血脉といふは、學問の系統的關係にして、意味といふは讀んで字の如く其人其人の學問の意味なり、一は縱的考察にして、一は橫的考察と見るを得べし、凡そ學問は縱橫に考察して、眞意義を探究すること、固より其所なりといふべきなり、

第五　教育論

仁齋は啻に學問に熱心なりしのみならず、又教育に力を盡くせり、彼れ自然に教育家の態度ありしものなり、故に教育上に於ても亦卓見の謹聽すべきものなきにあらず、殊に吾人の注意を惹くに足るものは、人才教育と師弟の道に關する言論なり、人才教育に就いては、彼れ論じて曰く、

夫れ聖人の教を設くるや、人によりて以て教を立つ、教を立てて以て人を驅らず、造作する所なく、添飾する所なし、人心の同じく然る所に出でゝ、強ふる所あるにあらざるなり、若し、夫れ、孝、弟、忠、信の、人は、天下皆以て善となし、皆以て美となして敢て譏るものなし、此れ、即ち、是學此れを外にして更に所謂學問といふものなし(童子問卷之上)

此れに由りて此れを觀れば、仁齋は總べての生徒を同一の模型中に入れて之れを鎔鑄陶冶するが如き畫一主義を取らずして、應病與藥の精神に本づき、各個人を特別に教養せんことを期せり、乃ち彼れは人才教育を主とするものなること疑なし、又其「造作する所なく、添飾する所なし、」といふを以て之れを見れば、ルッソー氏の如く天然自然の教育を重んぜしものなるを知るべきなり、東涯の古學行狀にも、其教導生徒、未嘗設科條、嚴督察、とあり、亦以て一證となすに足る、彼れは又師たるの道を論じて曰く、

師の責め甚だ重し、師たるの道は、務めて人材を長育するにあり、一師にして君臣の道備はる、謹まざるべけんや(童子問卷之中)

是れ亦人才教育の要を述ぶるものなり、仁齋尙ほ師弟の關係を論じて曰く、

古は道を崇ぶ故に師を尊ぶ後世は道を崇ぶことを知らず故に師輕し師は道のある所師を崇ぶは即ち道を崇ぶ所以なり故に師に君臣の義あり父子の親あり師として弟子の己れに勝ることを喜ぶものは眞の師なり己れに勝ることを忌むものは惡師なり弟子も亦之れを視ること猶ほ父のごとくにして己れが學其師に超ゆと雖も終身之れを敬して衰へざるを道となす若し少しく青藍の譽あるに及ぶときは室に入りて戈を操るの意あるものは眞の小人なるかな（同上）

師弟の道大に衰へたる今日にありては彼れが言一々藥石の効あるが如し彼れは嘗て同志會を設け親しく諸生と共に學を講せり、文集卷之六に同志會籍の申約を載す其中言へるあり云く、

蓋し學を講ずるの要は麗澤の益に若くはなし麗澤の益は與相親近するに若くはなし且つ人三不幸あり而して貧賤患難は與からず生れて學を知らず一の不幸なり學んで賢師友に遇はず二の不幸なり賢師友に遇ふて其要領を得る能はず三の不幸なり然らば人にして廣く交道を求めざるべけんや、

乃ち彼れが同志會を設けたるは親切に諸生を誘掖し其れをして十分に己れか學を了解せしめんとするにありしを知るべし彼れ又いかなる人を師とすべしやを論じて曰く、

病を治むるには須らく良醫を求むべし庸醫に委ねべからず一たび其治を誤るときは百の良醫ありと雖も其後を善くすること能はず、道を學ばんと欲するものは須らく天下第一等の人を擇んで之れを師とすべく半上落下の人を師とすること勿れ學問の成否得失俗師村學の能く識る所にあらざるなり（童子問卷之中）

是れ固より實行し難きことなりと雖も道德の事に關しては實に彼れが言ふ所の如きものあり師の人物を擇ばざれば誤れる學說は先入主となり易く善からざる品性は自ら影響を生ずべきが故に師の人物を擇ぶの一事は教育上最も先づ注意せざるべからざること復た論を俟たずといふべきなり、

第六　異端論

仁齋昂然一揚、孤鶴の雞群を出づるが如き姿勢を以て起り、洙泗の學を闡明し、道義の眞相を發揮せんと欲す、是を以て老佛等の謬見を指摘し、凡そ是等異端の敎を排斥すること、至らずといふとなし、其所論の要點は左の五項に總括するを得べし、

(一)仁齋思へらく、聖人は中庸を得たるものなれども、異端は之れを失し或は之れを過ぎ、或は之れに及ばず、老佛の如きは之れを過ぎたるものにして、申韓の如きは、之れに及ばざるものなりと、彼れ此の如き三種の段階を三大坎と名づけたり、其言に云く、

古より書を著はし、敎を立つるもの、紛々藉々、其衆きに堪へず、然れども三大坎に過ぎず、其高からず、卑からず、平常不易なる、此れを一大坎となす、乃ち中庸の極にして、聖人の宗旨なり、此れより高きこと一等なるときは、虛無となる、老佛の學、是れのみ、此れより卑きこと一等なるときは、功利となる、申韓商鞅の徒、是れのみ、老佛以下代異に地殊に交、出で迭に起ると雖も、此二端に過ぎず、假令ひ百世の後、異端者ありて出で、舊套によらず、新說を創唱するも、亦此二端に出づること能はざらん、其他區々たる半上落下の徒、亦論ずるに足らず、趙孟靜林兆恩が若き、乃ち近時の小異端、然れども三敎を假りて名をなすに過ぎず、故に其學大に謬ぐに至らず、亦笑ふべきなり、(童子問卷之下)

(二)仁齋思へらく、聖人の道は人倫のみ、人倫を外にして、復た道といふものあるなし、然るに老佛は虛無を尙び、人倫を省みず、此れ其聖人の道と相戾る所以なりと、其言に云く、

夫れ聖人の道は、彝倫を以て本となして、恩義を以て結となす、千言萬語、皆此れを以て敎となさゞるはなし、今夫れ佛老の敎たるや、淸淨を以て本となし、無欲を道となす、功夫既に熟するに、暨んでは、其心明鏡の空しきが若く、止水の湛たるが若く、一疵存せず、心地潔淨、此に於て恩義先づ絕えて、彝倫盡く滅ぶ、君臣父子夫婦兄弟朋友の交を視ること、猶ほ辮髮綴旒のごとく然り、聖人の道と相反すること、猶ほ水火の

相入るべからざるがごとし、云云（語孟字義卷之上）

又云く、

佛老は空虛を尙び聖人は實理を尙ぶ、故に佛老の書に鏡を以て譬をなすこと勝げて擧ぐべからず、浩々たる六籍語孟、一も鏡に及ぶものなし、其生死の差あるが爲めなり、夫れ道とは、君臣父子夫婦昆弟朋友の交にして、能く此五者を維持する所以は、亦恩義の兩者にあり、佛老の敎の若きは、專ら淸淨無欲を以て務となし、修行旣に熟し、功夫旣に成るときは、本心瑩然として明鏡の空しきが如く、止水の湛たるが如く、一塵染まらず、一疵存せず、難しといふべし、然れども恩義の心、劉喪斬絕、地を掃ふて盡き、父母を捨て、妻子を絕ち、綴旒（てつりう）の如く、土梗の如く、恬然として其愛を用ふる所なし、況んや君臣をや、況んや、兄弟をや、此に到るときは、聖人の道と實に天淵なり、云云（童子問卷之下）

明鏡止水の如き淨潔無欲の心を以て人間社會に處すること能はざるにあらず、然れども禪僧の徒、動もすれば輙ち人間社會の關係を輕視し、超然自ら高うするの傾向あり、是れ仁齋が此れと峻別せんと欲する所以なり、

（三）仁齋は、聖人の道を以て活動的とし、老佛等異端の道を以て靜止的とし、兩者の決して混同すべからざることを論ぜり、其言に云く、

蓋し聖人は天地を以て活物となす、故に易に曰く、復は其れ天地の心を見るかと、老氏は虛無を以て道となし、天地を視ること死物の如くなり、故に聖人は天道といひ、老子は天理といふ、言各〻當るところあり、此れ吾道の老佛と自ら異にして混じて之れを一にすべからざる所以なり、（語孟字義卷之上）

又論じて曰く、

理を以て主となすときは、必ず禪莊に歸す、蓋し道は行ふ所を以て言ふ、活字なり、理は存ずる所を以て言ふ、死字なり、聖人は道を見るや實、故に其理を說くや活、老氏は道を見るや虛、故に其理を說くや死、（同上）

又儒佛の異なる所は、唯用の上にあるのみならず、其理の躰に至りても

亦然ることを辨じて云く、

夫れ斯本あるときは必ず斯末あり斯末あるときは必ず其本なくんばあるべからず徒に其用處に於て相反するのみならず其躰の相異なること猶ほ水火黑白の相反し生死人鬼の相隔つるがごとく邈乎として相入るべからず云云（同上）

仁齋は天地も道も性も心も皆之れを活物視し、些の間斷もなく、活動的發展を期するものなり、故に老莊の寂靜主義 Quietism とは、自ら相背馳せざるを得ざるなり、

（四）仁齋思へらく、聖人は社交上に道を立つれども、老佛は之れに反し獨善主義に陷る、其異端たる所以のもの此にありと、乃ち論じて曰く、

聖人は天下の上より道を見る、佛老は一身の上に就いて道を求む、一身の上に就いて道を求むるが故に、天下の從ふや否やを顧みず、專ら清淨無欲、以て一己の安を成就せんと要し、卒に人倫を棄て、禮樂を廢するに至る、此れ異端たる所以なり、聖人は天下の上より道を見る、故に天下の同じく然る所に就いて道を見る、天下を離れて獨り其身を善くするを欲せず、故に其學を經世となし、其道を達道となし、其教を仁義忠信となす（童子問卷之中）

又一層委しく其意を叙述して曰く、

聖人は天下と共に斯善を同うせんと欲し、天下を離れて獨り其身を善くすることを欲せず、故に曰く、吾れ斯人の徒と與にするにあらずして、誰れとか與せんと、釋氏は然らず、其言に曰く、天上天下唯我獨尊と、此れ其先づ聖人と異なる所以なり、蓋し釋氏は天下を離れて獨り其身を善くせんと欲す、故に其始初功夫を用ふる處、天下に通じ、萬世に達して、須臾も離るべからざる上にあらず、專ら其一身に就いて意見を生ず、生死の爲めに念重く、愛根絶ち難く、心猿意馬、羈束を受けず、乍ち出で乍ち入り、或は眞或は妄、變幻起滅、奈何ともすべきなきが爲めに、乃ち山林に屏居し、世故を謝絶し、坐禪面壁、硬く斯心を澄清するを以て事となす、其修行既に久しく、功夫既に成るに及んで、忽ち天地

萬物、悉く皆幻妄、山川城郭、總べて空相を現じて、獨り此心、孤明歷々、萬劫盡くることなきを見て、自ら三界を超脫すといふ、遂に人事を廢して修めず、天下を蔑して顧みず、顏を抗げ眉を揚げ、肆然として道を談ず、殊に知らず、其孤明歷々、萬劫盡くることなきものは、乃ち虛見にして、實理にあらず、彼れ天地を微塵にすとも、天地何ぞ曾て微塵ならん、人世を夢幻にすとも、人世何ぞ曾て夢幻ならん、天は是れ天、地は是れ地、古は是れ古、今は是れ今、晝は是れ晝、夜は是れ夜、生は是れ生、死は是れ死、夢は是れ夢、幻は是れ幻、有るものは自ら有り、無きものは自ら無し、明々白々、復た疑を容るゝ所なし、萬古の前も此の如く、萬古の後も亦此の如し、聖人は有は其有に還へし、無は其無に還へし、また一毫の智慧を其間に容れず、本と愕くべきこともなく、亦讃すべきこともなし、予を以て之れを見るに、二氏（即ち老佛の事）の敎は、皆其意想造作に出でゝ自然の正道にあらず、夫れ人の當に修むべき所のものは、人倫のみ、人の當に務むべき所のものは、人事のみ、天下仁にあらざれば、親まず、義にあらざれば、行はれず、故に人倫を外にして道なく、仁義を外にして敎なし、萬世の遠き、四海の廣き、一日も離るゝことを得ず、故に仁に居り、義に由るときは、坐禪せず、面壁せずと雖も、然れども、身自ら修まり、家自ら齊ひ、國自ら治まり、天下自ら平かにして、往くとして可ならずといふことなし、苟も仁に居り義に由らざるときは、設ひ其心、明鏡の如く、止水の如く、一毫人欲の私なくとも、益なし、此れ聖人の道、諸子百家を度越して、宇宙の間、獨り尊しとする所以なり、（同上卷之下）

仁齋が論、整々堂々、殆んど老佛の壘を摩するの概あり、彼れが言ふが如く、老佛が一己の全きを求め、山中獨善の趣あるは、到底藏ふべからざる事實なり、然れども老子は三寶中に慈を算へ、佛氏は一切衆生を救ふの慈悲心あり、果して然らば、是れ亦仁と同一視すべきものにあらざるか、此れ彼れが辯解なかるべからざる所なり、

（五）仁齋思へらく、老佛の儒敎と異なる所は其義を知らざるにありと、乃ち佛氏を論じて曰く、

其慈悲濟度を主とするは、仁に似たり、然れども義を知らざるは一なり、殊に知らず、義は天下の大路、一日も離るべからざるを、老氏も亦然り、（同上）

又後世の儒者（即ち宋儒）をも併せ論じて曰く、

佛老の吾儒と異なる所以のものは、專ら義にあり、而して後儒の聖人と相差ふ所以のものは、專ら仁にあり、其故何ぞや、佛氏は慈悲を以て心となし、平等を道となす、故に義を以て小道となして之れを慢棄す、殊に知らず、義は天下の大路、苟も義を捨つるときは、猶ほ正路を棄て、荊棘に由るがごとし、其行ふべからざるや必せり、後儒者の如きは、其德量淺狹、差別甚だ過ぎて、包容含弘の氣象なし、故に仁を視ること泛然として緊要なきものゝ若し、而して其刻薄の流に陷ることを知らず、是れ聖人と相差ふ所以なり、（語孟字義卷之上）

仁齋が老佛の敎の平等觀に偏して、差別相を蔑視するを非議するは當れり、今日にありては此論、基督敎にも適中せり、今日の學者が基督敎に對する態度、仁齋が老佛に對する態度と相似たるものあるは、以（ゆゑ）なきにあらざるなり、

上來叙述するが如く、仁齋痛く老佛を排斥すと雖も、亦時ありて差異相を超絕し、彼此共通の點を執へて、圓融無礙の境界を示すことあり、例へば、送浮屠道香師序に云く、

夫れ學者より之れを見れば固より儒あり佛あり、天地より之れを見れば本と儒なし佛なし、唯其れ一道のみ、所謂道といふもの、即ち天地の公道にして、一人の得て私する所にあらず、聖人と雖も能く之れを損益することなきなり、

是れ後世學者の往々議する所となりたれども、反りて其見解の公平にして豁大なるを見るべし、又道統の圖を以て聖人の意にあらずとし、論じて曰く、

禪宗的傳の若き、是れ天下の道を私して、一家の物とするものなり、夫れ道の人にある、猶ほ日月の天に繫るがごとし、目あるものは皆能く

視る、豈に己れが物となして、私に相付授することを得んや、(童子問卷之下)

仁齋が此論亦甚だ好し、儒者の中には或は己れ獨り聖人の道を傳ふるが如く思惟し、行動し、主張するものあり、是れ聖人の道を壟斷せんと擬するもの、其見解の陋劣なる、根柢より勦絶せざるべからざるものなり、

第七　宋學論

仁齋が古學を主張するは、宋學を以て洙泗の眞相を執らへ得たるものにあらずとするに本づく、何故に宋學を以て洙泗の眞相を執らへ得たるものにあらずとするかなれば、宋儒は老佛の說を參酌し、標榜して儒教といふと雖も、其實孔老佛三教の融合調和に成るものなり、今仁齋が宋學と異なる重要の點を擧ぐれば左の如し、

(一)宋儒は氣質の性を變化して本然の性に復へるべしとして復性復初の說を立てたり、然るに仁齋は復性復初の說を取らず、唯己れに具有する善良の元素を發展することをのみ期せり、乃ち論じて曰く、

先儒復性復初等の語を用ふ、亦皆莊子に出づ、蓋し老子の意おもへらく、萬物皆無に生ず、故に人の性や、其初め眞にして靜なり、形既に生じて而して欲動き情勝ち、衆惡交攻む、故に其道專ら欲を滅して以て性に復へるを主とす、此れ復性復初等の語の由りて起る所なり、儒者の學は然らず、人の四端あるや、猶ほ其四體あるが如し、苟も之れを養ふことあるときは、猶ほ火燃へ泉達し、自ら已むこと能はざるがごとし以て仁義禮智の德を成して、四海を保つに足れり、故に曰く、苟も其養を得れば、物として長ぜずといふことなし、苟も其養を失へば、物として消せずといふことなし、初めより欲を滅して以て性に復へるの說なし、老莊の學と儒者の學と固より生死水火の別あり、其源實に此に判る(語孟字義卷之上)

是れ宋儒の主張する復性復初の說は老莊に淵源するを論證するものにて、其靜止的の態度は彼れが活動的の態度と正反對をなせりと謂ふべきなり、

(二)宋儒は性に二種ありとし(之れを名づけて本然の性、氣質の性と稱せり、然るに仁齋は唯一氣質の性あるのみ、本然の性てふもの、曾て有るなしとせり、乃ち論じて曰く、

後儒、孔子の言を以て氣質の性を論ずとなし孟子の言を本然の性を論ずとなす、信に其言の如くなるときは、是れ孔子は本然の性あるを知らず、孟子は氣質の性あるを知らざるものにあらずや、惟一性をして二名あらしむるのみならず、且つ孔孟同一血脉の學をして、殆んど涇渭の相合し、薰蕕の相混ずるが若く、一清一濁、適從すべからざらしむ、其言支離決裂、殆んど相入らざること此の如し、夫れ天下の性參差齊からず、剛柔相錯はる、所謂性相近しと、是れなり、而して孟子思へらく、人の氣稟、剛柔同じからずと雖も、然れども其善に趨くは一なり、猶ほ水に清濁甘苦の殊ありと雖も、然れども其下に就くは一なるがごとし、蓋し相近きの中に就いて其善を擧げて之れを示すなり、氣質を離れて言ふにあらず、故に曰く、人の性の善なるや、猶ほ水の下に就くがごとしと、蓋し、孟子の學、本と未發已發の說なし、云云(同上)

仁齋尙ほ又宋儒の所謂性善は畢竟善なく不善なきの說に落つとし、論じて曰く、

夫れ跡の見るべきありて而して後、之れを善といふ、若し未だ跡の見るべきあらざるときは、將た何ものを指して善とせん、既に惡の見るべきあらざるときは、又善の見るべきなし、故に渾然たる至善といふと雖も、然れども實は空名のみ(同上)

乃ち彼れは絕對善の如きものを認容せざるを知るべきなり、

(三)宋儒は大極といひ、天といひ、性といひ、仁といひ、皆理となして解釋せり、然るに仁齋は活動的に一切を考察し、痛く理の靜止的なるを排斥せり、乃ち太極を論じて曰く、

所謂太極といふものは、亦便ち此一元氣を指して言ふときは、則ち之れを物なしと謂ふべからざるなり(童子問卷之下)

又天を論じて曰く、

宋儒謂ふ、天專ら言ふときは、則ち之れを理といふと、又曰く、天は即ち理なりと、其說、虛無に落ちて、聖人天道を論ずる本旨にあらず、蓋し有心を以て天を見るときは、災異に流る、漢儒災異の學の若き、是れなり、無心を以て天を見るときは、虛無に陷る、宋儒の天は即ち理なりの說の若き、是れなり、(語孟字義卷之上)

其他宋儒が性は即ち理なりの說を駁し、(同上)又仁を以て理となすの說を非とせり、(同上)又宋儒が仁を以て性となすに至りては、深く以て道に害ありとなせり、性は宋學にありては靜止的のものなればなり、

(四)仁齋は宋儒の用語が多く老佛に出で、聖人の本旨に背戾せるを論ぜり、即ち虛靈不昧の如きは、禪書に出で、明鏡止水の如きは、莊子に出で、躰用一源、顯微無間の如きは、淸凉國師華嚴の疏に出で、沖漠無朕は莊子に出で、萬象森羅は佛書に出づとせり、又天理の二字の如きも、本と老子に出づとし、論じて曰く、

按ずるに、天理の二字、屢、莊子に見ゆ、而して吾聖人の書に於て之れなし、樂記に、天理人欲の言ありと雖も、然れども本と老子に出でゝ、聖人の言にあらず、象山陸氏之れを辨ずること明かなり、(同上)

仁齋は總べて是等の老佛の用語を除去し、之れに附隨する異端の思想を一掃し、直に孔孟の眞面目に溯回せんと欲するものなり、其他尙ほ異同の點あれども已に宇宙論道德論等の中に詳悉せるを以て復た玆に贅せざるなり、宋儒の中に於て仁齋は最も程子を稱揚せり、其言に云く、

予おもへらく、孟子の後、道を識るものは、程子に若くはなし、然れども猶ほ高遠を悅ぶの意あり、故に孔孟の旨に於て齟齬する所のもの、間〻多し、(童子問卷之下)

朱陸の異同に就いては仁齋左の如く辨せり、云く、

鵞湖異同の辨、朱陸の門徒、互に相詆譏す、今に於て數百年未だ了らざるの論、云云、宋元より明に至るまで竟に一定の說なし、若し二先生の說を去りて直に之れを經に求めば、則ち聖人の旨、明白分曉、復た疑ふべきなし、中庸に曰く、苟も至德ならざれば、至道凝らず、故に君子は德

性を尊んで、而して問學を道ふ、言ふこゝろは問學を道ふを知ると雖も、然れども德性を尊ぶを知らざれば、則ち問學も其問學たるを得ず、而して道の實に於て、眞に之れを知るを得ず、故に君子は先づ德性を尊ぶを以て本となす、而して問學を道ふを以て功となす、此れ聖門眞正の學問にして、而して世俗の徒に問學を道ふを知りて、而して德性を本とするを知らざるの比にあらず、此指先づ晦翁の意に戻る所以にして、而して象山に於ては、其一を得て、其二を遺すの病を免るゝこと能はず、（日札）

又文集卷之三に鵞湖異同辨一篇あり、朱陸二氏の學を對照して論ずる處、頗る其肯綮を得たるものあり、然れども、東涯以て定見にあらずとす、故に今此に引證することを敢てせざるなり、

第八　批判

（一）

仁齋は宋儒の寂靜主義 Quietism に反し、活動主義を取り、世界と人生とを併せて悉く活動的に考察せり、即ち彼れにありては世界は一大活物にして生々已まざるものなり、道といひ、性といひ、心といふもの亦一として活物にあらずといふことなし、學問の如きも畢竟活物を治むる活法にして、道德の如きも、個人の社會に對する活動的發展に外ならざるなり、此の如き活動主義を以て、世界及び人生の事を攻究し來たるが故に、彼れが主張、自ら活氣を帶び、當時に於て、一種の異彩を放てり、彼れ嘗て白骨觀の法を修し、其是にあらざるを悟れり、其是にあらざるを悟れりとは、其消極主義にして、人生の活氣を殄滅し、決して道の是正を得たるものにあらざるを悟れるなり、是を以て彼の消極主義に反して、活動主義を取り、遂に鄒魯の學をも活動主義によりて解釋せり、鄒魯の學、固

より消極主義にあらず、然れども彼れが唱道するが如き活動主義は、從來未だ之れありしにあらず、兎に角慶元以來頗る寂靜主義に傾ける儒教に俄然一段の活氣を添へたるは仁齋の功といふべし、仁齋が世界及び人生觀は、活動主義の上に建設せられたるを以て、健全なるものなり、其生々主義といひ、樂天主義といひ、積極主義といひ、毫も佛教の如く不健全なる傾向を含有せざるなり、此の如き健全なる世界及び人生觀が當時我邦に唱道せられたるは、豈に國民の爲めに賀すべきことならずとせんや、

（二）

當時仁齋が獨り宋儒の寂靜主義に反對せしのみならず、素行も亦殆んど同一轍に出でたり、素行は別に活動といふことを言はざれども、全躰の旨意を考ふれば、之れを活動主義といふも、亦不可なきが如し、殊に素行取る所の武士道の精神は活動主義にあらずして何ぞや、又素行と仁齋とを對照して之れを考ふるに、類似の點少しとせず、例へば（一）素行は仁を以て五常を兼ぬとし、聖人の教は、之れを以て極度となすと論ぜり、然るに仁齋亦仁を以て聖門學問の主義綱領とし、此れを外にして學問なしと論ぜり、（二）素行宋儒の敬を專らとし、寂靜無事に陷るの弊を論ぜり、仁齋亦一の敬の字を守れば、乃ち可なりといふは、大に聖人の意にあらずと論ぜり、（三）素行は天地に開闢なし、未判なしとして、天地創造の說を取らず、仁齋も亦萬古無窮論を唱へて、天地に始終なし、開闢なしといへり、（四）素行は天地生々息むなきことを論じ、生々主義を道破せり、仁齋も亦生々して已まざるは、即ち天地の道なりと論じ、生々主義を唱道せり、（五）素行は宋儒の學は、大槩禪佛を混入するものとして、之れを排斥せり、仁齋も亦宋儒の學は老佛の說を取るものにして、孔孟の眞面目にあらずとせり、凡そ是等の點、兩々併行し、暗合とはいへ、殆んど人をして怪しましむるに足る、然れども全く暗合に外ならざるなり、日本民族の特質の顯現として起れる武士道の指示するが如く、日本人は蓋し消極主義を取らざるものにして、寧ろ先天的に活動的發展を要するものなり

ん、然らざれば素行と仁齋と殆んど同時に起り、宋儒の寂靜主義に反對して古學を主張し、多くの點に於て暗合するもの、豈に亦奇ならずや、思ふに二人のもの偶然日本民族の思想を代表して、其先天的に要する所の活動的發展の主義を喝破せるなり、是れ日本民族の特質の顯現なりと見做すを得べきなり、

（三）

仁齋が世界を以て一大活物となし、一切萬物、生々して斷えず、無窮に至るとする處、殆んど今日の進化主義を豫想するが如し、然れども彼れが世界に關する創見は、儒教の歷史に於て一奇觀を呈するに相違なきも、其實甚だ幼稚にして、又缺乏せるものなり、但侮るべからざるは、彼れが道德主義なり、彼れが言行の道德的にして、頗る理想に近かりしは、其取る所の道德主義より來たること疑なし、彼れの道德主義は活動主義の上に建設せられたり、其旨意たる、バウルセン一輩の活動主義と、根柢に於て暗合する所あるが如し、仁齋はバウルセン氏の如く一切生的官能の健全なる使用を要するの觀念を有せず、然れども其道德上に於て活動的發展を主張するはバウルセン氏に近し、又之れを考ふるに、仁齋の道德主義は己れに具有する四端を擴充して、仁義の德を成し、以て治國平天下を企圖する者なり、此の如くなれば、グリーンミュルヘッド諸氏の自我實現說Theory of self-realizationと左右逢原、期せずして相合する者といふべし、仁齋が性と德とを峻別せんとする所は、强辨の訾を免れずと雖も、能く彼れが論ずる所の旨意を考察するに、孟子四端の說に本づき、自我實現の要を唱道するに外ならざるなり、即ち四端は各自の具有する本然の善にして、未だ實現せられざる自我なり、四端が擴充せられて仁義禮智の道德となりたる以上は、是れ已に實現せられたる自我なり、此の如くなれば、是れ亦自我實現說ならずや、今や自我實現の說は、遠くこれを海外のグリーンミュルヘッド諸氏に求むと雖も、近く我邦に於て其痕迹を發見すると、亦一奇といふべし、蓋し東西洋の道德發達の歷史を異にすと雖も、其根柢の處に至れば、必ずしも相背馳するものにあ

ら、ざるを知るべきなり、仁齋固より陽明學派の人にあらずと雖も、亦時に之れに類することあり、語孟字義(卷之上)の末に良知良能を論じ、本然の善即ち四端の心とせり、此の如くなれば、四端の心は即ち良心 Conscience の異名なり、其誠といふものも、恐くは之れと同一ならん、仁齋曾て陽明を評して曰く、

陽明の人となり、聰明絶倫古今に縱まゝなり、二公(朱陸二氏をいふ)と雖も、及ばざること遠きこと甚し、然れども學問空疎、磨勵の功甚だ少し、而して其學本と禪學に得て、孔孟の宗旨に於ては、實に數塵なり、(童子問卷之下)

仁齋が陽明の人物を稱揚するもの、彼れと同じく良心を執へて立つが爲めなり、但陽明が禪學の臭味を帶ぶるを取らざるのみ、又仁齋が良心の道德的價値を認容するはグリーンミュルハッド諸氏と其揆を同ふするを忘るべからざるなり、

(四)

仁齋の議論、多くは光明正大にして、洵に鄒魯の遺響ありと雖も、亦往々思想の混亂を免れず、彼れが頭腦は雄大にして明晰なれども、必ずしも、論理的ならず、否、論理的なるを欲せざるが如し、彼れ曾て論じて曰く、

學者當に悟門の自ら開くるを俟つべし、我れより之れを開發することを勿れ、(童子問卷之中)

且つ彼れ思慮安排强探力索の必要なきを言へり、是れ思想力を閑却するものなり、此の如くにして何等の知的探究をかなし得べき、平生深思熟慮して、解答を得ず、機に觸れて忽然として悟入することもあらん、然れども思想力を閑却すること、是れ豈に學者の取るべき方針ならんや、彼れ又曾て論じて曰く

聖人は有はに還へし、無は其無に還へし、亦一毫の智慧を其間に容れず、(同上)

彼れ一毫の智慧をも用ひざる聖人を其道德的模範となす、其知的方面に發展することの少かりしもの、亦怪むに足らざるなり、又曰く、

夫れ吾所謂實知とは固より見聞學知によらず、又坐禪入定によらず、母胎中より帶び來たる孟子の所謂良知良能是れなり（同志會筆記）

見聞學知は即ち今日の知的學問なり、然るに仁齋は實知は先天的に吾人の具有する所とし、唯此れを擴充すれば足れり、別に見聞學知を要せずとせり、是れ一切の知的學問を拒絶するなり、仁齋が往々思想の混亂を免れざるもの蓋し其知的探究の要を認容せざるに由るなり、殊に仁義禮智は德の名なり性の名に非ずとするの說の如き、支離決裂も亦甚しと謂ふべし、彼れが少しく知力を用ひ、幷然論理を正すことを務めたりしならば、此の如き思想の混亂は免れ得しならん、彼れは道德の一方に偏せしものなり、故に政治、經濟及び其他一切社會の事に關しては、迂濶の譏を免れざるなり、要するに德勝ちて智未だ及ばざるの看なしとせざるなり、智德圓滿は人の理想なりと雖も、多くの人に於ては一方に偏せり、智に深きものは德之れに副はず、德邵きものは智之れに及ばず、今仁齋の如き亦此例に洩るゝこと能はざるものなり、

（五）

仁齋の短處の一つは古人を過信するにあり、古人の說固より信ずべきもの多く、殊に聖賢の垂訓豈に拳々服膺するに足らずとせんや、然れども古人は決して過信すべからず、聖賢の垂訓と雖も盲目的に信奉すべからず、若し古人を過信すれば、己れが思想の自由を失ふが故に、知的探究の發展を沮礙するを免れざるなり、仁齋論じて曰く、

學者、聖人の言語上に於て一字を增すべからず、又一字を減ずべからず、語孟二書の若きは實に天下古今の道理を包括し盡くせり、所謂徹上徹下なるもの是れなり、宋儒動もすれば佛老の語を引いて以て聖人の學を明かにす、吾れ深く其非を識るなり（日札）

是れ孔孟を過信するものにあらずして、何ぞや、語孟の二書が毫も物理上の事を說明せざるは、言ふまでもなく、道德上の事に於ても、固より一切の道理を包括するものにあらず、例へば、認識的發展の必要を說かざるが如き、各個人相互の權利を明かにせざるが如き、共同愛國を敎へざ

るが如き、私德を詳悉して、公德を疏外するが如き、清潔の尙ふべきを示さゞるが如き、一夫一婦の制の取るべきを論ぜざるが如き、其缺乏の點を擧げ來たらば、殆んど際限なからんとす、語孟の二書、豈に古今の道理を盡くすものならんや、仁齋又曰く、

深く古人を信ず、是れ進學の極則、天下の至善なり、所謂深く古人を信ずるもの、一毫も己れが見を執らず、己れが說を雜へず、佩服潛玩十分信じ得るに及んで、正に之れを深く古人を信ずといふ云云（同上）

此の如く深く古人を信ずるは、己れが知力を侮るの甚しきものにて、知的探究の發展は之れが爲めに沮礙せられざるを得ず、深く古人を信ずるよりは、寧ろ深く古人を疑ふこと、反りて是れ進學の極則、天下の至善とこそ言ふべけれ、何故なれば疑惑は知的發展の端緒なればなり、仁齋自らも「積疑の下大悟あり」といふにあらずや、盲目的に古人を信ずることを勸むるもの、蓋し亦思はざるに坐するのみ、

（六）

道德と歷史とを混同するは、支那古來の通弊なり、而して孔子實に之れが先驅たり、即ち春秋の如きは、全く道德と歷史とを混同するものなり後世の學者亦道德的思想を主として歷史を編著せり、通鑑の類の如き蓋し其顯著るもののなり、然るに仁齋も亦此例に洩れず、道德と歷史とを混同し、論じて曰く、

昔より司馬遷班固を以て良史と稱す、文章は則ち之れあり、議論體製は則ち未だし、人の爲めに傳を立つるものは、其道德事業、節操行義、萬世に師表たるに足りて、而して後、以て之れを傳すべし、然らざれば則ち立つべからざるなり、蘇張が姦計詐謀は、曠古の罪人なり、史遷之れが爲めに傳を立つるは、何ぞや、司馬相如が如きも、亦傳するに足らず貨殖日者龜策等の傳皆然り、若し此れに就いて當時の風俗人物を揭示せんと欲せば、須らく之れを本紀世家の間に散見すべし、別に傳を立つべからず、晉の孫恩、宋の李全等は、盜賊のみ、亦別に傳を立つるものは、何ぞや、蓋し史遷傭を作りて、而して後の史臣卓識なし、故に其例

を改むること能はず、青史を汚衊すといふべし、班固が五行志も亦然り、其記せずんばあるべからざるものは、當に之れを本紀に附すべし、其志を設くるは不可なり、先儒、范曄が方伎傳を著はすを以て深く非となす、甚だ是なり、唯、歐陽公の五代史、體製議論、實に古今の冠冕たり、讀まずんばあるべからず、凡そ國家の治亂成敗、風俗政體に關し、百代の鑑戒とするに足るものにして、而し後、紀すべし、其瑣々たる事跡の小說稗官に入るべきものは、書せざるを是となす、是れ史を作るの法なり、(童子問卷之下)

仁齋がいかに歷史の目的を誤解せるかは此れに由りて知るべきなり、歷史は、史的事實を忠實に叙述して之れを後世に傳ふるものにして、其敎訓として人生に裨益あるは勿論なれども、直に以て道德書と見做すべきものにあらず、假令ひ德業の見るべきものなきも、其事蹟にして人文の變動に關係あらんか、亦之れを史乘に載せざるべからず、若し仁齋が言ふ所に從はゞ、孔孟の外殆んど傳するに足るものなからん、此の如

以て能く夫子の道を傳へて謬らざること此の如くならんや、蓋し孟子嘗て言ふ、聖人の世を去ること、此のごとく其れ未だ遠からず、聖人の居に近きこと、此のごとく其れ甚しと、其命世の才を以て且つ聖人の世と聖人の居とを去ること、其近きこと此の如し、宜なるかな、聖人の道を傳へて謬らざること、漢唐の諸儒の如きは、雋傑の才ありと雖も、道統の傳に於て繼述すること能はず、獨り宋の諸君子の如きは、畧、其統を承けて其道を失はずといふべきなり、然れども聖人の道、大中至正、精微純粹、孟子の後、諸儒全く其體を備へて、偏なく黨なきこと能はず、然れば、孟子殁して後、聖人の道を略傳ふといふは可なり、全く傳ふといふは不可なり、蓋し孟子の後、道を知るもの、二程及び朱子なり、是れ聖人の道畧傳ふるなり、(愼思錄卷之四)

乃ち彼れが程朱を以て孔孟の嫡傳とするを知るべきなり、殊に朱子に就いて論じて曰く

陳北溪が曰く、孔孟周程の道、朱子に至りて益明かなりと、魏鶴山曰く、

韓子謂ふ、孟子の功、禹の下にあらずと、予謂ふ、朱子の功、孟子の下にあらずと、陳魏二氏の言、適中といふべきなり、誰れか過當の言、其好む所に阿るといはんや、(同上卷之五)

此の如く朱子の功を以て孟子の下にあらずとするの說に贊同するを以て之れを觀れば、其崇敬の念、決して尋常ならざりしを察すべし、然れども朱子の如きも、未だ聖人といふべからざるが故に、過失なきを免れずとせり、其言に云く、

夫れ朱子固に聖人にあらず、且つ其著述する所、亦甚多し、其中過失恐くば亦間、將に之れあらんとす、故に古人曰く、人聖人にあらざれば、誰れか過なからんと、又曰く、智者も千慮に必ず一失ありと、然らば過失の事、朱子と雖も、免れざる所なり、然りと雖も、孟子の後、六經語孟を傳述して、後世に垂示し、往聖を繼ぎ、來學を開くもの、朱子一人のみ、其功恐くば孟子の下にあらず、恨むらくは後人往々に朱子を知らず、且つ未だ朱子の全書を見ず、故に其疑ふ所未だ朱子立言の本旨に達せざ

生の常談となす、而して復た意を此に留めず、予深く以て遺憾となす敢て誇言をなして世の識なきものを欺かざるなり、云云、

孟子の又作るといふは堯舜既に沒せし上に更に邪說暴行の起りたるをいふものなり、然るに仁齋又と復とを同一視し、又作るを再び作るの義に誤解し、得意に一家の見解を述べ、是れを董の三策、韓の原道にも讓らずとの自書自賛をなせり、識者顰蹙せざらんと欲するも、豈に得んや、然れども仁齋が何等の師傳をも俟たず、自ら混沌を開拓して古學の一派を開きしを思へば、素行子と同じく之れを豪傑の士と稱するも毫も其不可なる所あるを見ざるなり、

(八)

仁齋が世界觀は一元氣によりて解釋を試みるものなるが故に、唯氣論なり、唯氣論は宋儒理氣の說に對して之れを言へば、唯物論なり、宋儒は理氣の二元を以て世界を解釋せり、其理といふは、形而上のものにて觀念Idee若くは理性Vernunftに比すべく、其氣といふは、形而下のものにて

現象 Erscheinungen 若くは物質 Materie に比すべきものなり、易の繫辭に云く「形而上者謂之道、形而下者謂之器」と、道は即ち理にして、器は即ち氣なり、彼れと此れと同一物の異名と知るべし、宋儒は此の如き理氣の二元を立てゝ世界の根本主義となせり、然るに仁齋之れを非として氣の一元を取り、唯氣論を主張せり、故に彼れが唯氣論は唯物論なりといふべし、然れども氣といへば古來必ずしも物質を意味せしにあらず、文子九守篇の中に言へるあり、云く「氣者生之元也、神者生之制也」と、茲に氣といふは、殆んど生命發展の根本的活動を指すものに似たり、漢儒の所謂元氣の如きも、物質よりは寧ろ「エネルギー」の類を意味するが如し、仁齋の「一元氣」と稱するものも、漢儒の說に本づき「エネルギー」の類を意味するにわらざるか、殊に世界を活動的に考察する所より之れを見れば、人をして愈其然るを想見せしむ、此の如くなれば、彼れが世界觀は靈活論 Animismus 即ち活力論 Vitalismus に近しといふべし、然れども彼れが佛教の唯心論に反して起れる所より之れを考ふれば、又唯物論者の態度な

しといふべからず、但彼れが世界觀は唯物論に傾向せるにせよ、彼れが道德主義は全く理想的なり、唯物的にあらず、即ち品位を高尙にし、人格を完成して嵩高壯大なる理想を實現せんとする活氣は爵勃として彼れが言論中に見ゆ、彼れが道德上に於て理想派に屬すること、決して否定すべからざるものあるを知るべきなり、

第九　仁齋門人

〔東涯以下仁齋の子孫を除く〕

並河亮、字は簡亮、私に諡して天民といふ、後に出だす、

中江一貫、字は平八、岷山と號す、晩年薙髮して快安と稱す、東涯其墓誌銘を作る、文集卷之十四に見ゆ、岷山が事後に出だす、

北村可昌、字は伊平、篤所と號す、北村季吟の氏族なり、近江の人、京師に講學す、盡箴錄卷之二に曰く、「踰冠從先人學、不復祿仕、夙淹貫墳籍、老而不倦、甚爲縉紳所重」と、彼れ嘗て上皇に侍講し、儒服儒巾及び名硯を賜はる、享保三年歿す、年七十二（一説七十三）自筆歳暮書懐の詩あり、云く、

少小涉經史、性氣耽詞章、宿儒時濟々、共是丈人行、生平所畏敬、此日皆旣亡、後生何寂寞、聖學將榛荒、長安幾萬戸、無人共商量、所好與世乖、爲愚又爲狂、遭遇千古少、吾儕特何傷、幸無升斗繫、從意自徜徉、請託絶權勢、拜謁無朔望、月花屬我去、吟哦習爲常、又無沈痾患、老去猶堅强、眼精耐誦讀、足力涉澗岡、車馬不須駕、冠蓋何假張、生理又略足、不用求皇々、寒暑給裘葛、朝晡有糟糠、回首一世裏、比屋屢低昂、吾不覺衰廢、未嘗有般昌悲貧兒、女態豈入丈夫腸、梅蘂欺雪色、柳條洩春光、二歳此夜盡、依舊迎新陽、

著はす所、古學先生碣銘行狀一卷あり、其事蹟は先游傳、野史卷二百五十八、近世叢語卷五及び畸人傳卷之二に見ゆ、

小河成章、字は伯達、一の字は茂實、通稱は茂七郎、立所と號す、京師の人、慶安二年に生れ、元祿九年に歿す、死因は河魚の毒に中れるなり、享年四十八、曾て學規三條を定めて之れを齋壁に揭ぐ、其一に云く、己れに反求して人に責むる勿れ、其二に云く、忠以て己れを盡し、恕以て人を待つ、其三に云く、人の詐を逆へず、己れが不信を思へ、立所書を善くし、兼ねて釋氏の書を解し、旁ら醫藥に通ず、其學の大旨誠を立つるを主とし、中庸に所謂善を明かにし、身に誠なるを以て其要旨となす、嘗て學說上下篇を著はす、彼れ思へらく、善とは惻隱、羞惡、恭敬、是非の心、人々

固有する所の善を謂ふなり、明とは擴めて之れを充て、盛大光明ならしむるを謂ふなり、身に誠なるとは、其なす所の善、純一自然にして一毫も其間に意を著け力を容るゝことなきを謂ふなり、誠は聖人の至なり、聖人は人倫の極なり、故に人倫を明かにせんと欲するときは、則ち其極を致さざるべからずと、其抱負の大、以て知るべきのみ、著はす所論語國語解十卷、伐柯篇二卷、聖教錄、學論各〻一卷及び文集四卷あり、盍響錄卷之二に云く、

小河成章、北村可昌、久しく京師にあり、相從ふこと尤も久し、衆推して上足となす、成章京師の產、博綜の譽なしと雖も、務に應ずるの材あり、後、江戸に遊び、上野に寓す、常藩義公の招致する所となる、元祿丙子の歲、祿を辭して西歸し、京に終ふ、

東涯其墓誌を作る、文集卷之十四に見ゆ、又其事蹟は先游傳、先哲叢談後編卷之二及び近世叢語卷之五に見ゆ、

小河成材、字は莊吉、德所と號す、先游傳には字は茂輔、弘齋と號すとあり、立所の弟、享保年中歿す、年七十二、

淺野文安、秋田侯に仕ふ、著はす所、論語便蒙あり、

荒川秀、字は敬元、一の字は景元、蘭室と號す、後又天散生と號す、通稱は善吾、山城の人、古義堂中に千里の駒の稱あり、其人となり、明敏豁達にして經史に精通す、十四歲の時より仁齋事あるに當りては、之れに代はりて經義を講說し、諸生を訓督す、先輩老生ありと雖も、之れと抗すること能はず、塾中推して都講となす、塾に往來するもの、敬服せざるなし、十六歲の時紀藩に聘せられて、之れに仕へ、記室となる、天散八歲より業を仁齋に受け、紀藩の聘に應ずるまで、堀河塾に寓すること此に八年なり、其師弟の間に於て信愛最も厚し、仁齋又其門に入ること尤も群弟子に先なるを以て之れを遇すること他に異なり、然りと雖も天散終身專ら師說を主とせず、思へらく、吾洙泗の道、大に唐宋の間に備はる、程朱二公之れを集成す、其大意は往聖を繼ぎ來學を啓き、老佛の空妙を排し、管商の功利を擯くるにあり、若し世儒の道義を以て己

れが任となし、能く此意を續くるものあらば、是れ眞の儒者なり、何ぞ必ずしも字々句々其師說を守りて而して後能く其學を奉ずるものとせんやと、仁齋語孟字義を著はすや、卷首ごとに、最上至極宇宙第一の八字を安置し、以て崇重の意を表す、當時弟子及び朋友異議あるなし、獨り天散思へらく、語孟を推尊して、特に崇重の意を表するときは、恐くは六經を睥睨し、之れを孔孟の外に置くに擬し、甚だ聽聞を驚かさんと、乃ち之れを削去せんことを請ふ、仁齋因りて之れに從ふ、天散享保二十年を以て卒す、年八十二、其事蹟は教育史資料卷之十二及び先哲叢談後編卷之三に見ゆ、

林義端字は九成、通稱は九兵衛、文會堂と號す、平安の書肆、元錄年中歿す著はす所扶桑名賢文集七卷、扶桑名賢詩集七卷、文林良材七卷、詩林良材□卷、文法援幼抄五卷、玉箒子六卷あり、

中島義方字は正佐、訥所（一に納所に作る）と號す、又浮山と號し、孤山と號す、京師の人、生徒を教授する、三十餘年、享保十二年を以て歿す、年七十、著はす所、四書通解十卷、孤山文集六卷等あり、東涯其墓表を作る、文集卷之十四に見ゆ、云く、

> 吾先君子の道を倡ふる、當時堂に升り室に入るもの、人自ら涇勵、言必ず古を稱し、聖賢を以て自ら期せずといふことなし、今に已に六十餘年、或は故、或は耄、或は其志を墮す、而して講習多年、老いて倦まざるものは、吾れ浮山子を見る、

又其事蹟は近世叢語卷八に見ゆ、

瀨尾維賢、字は俊夫、通稱は源兵衛、用拙齋と號す、京師の人、著はす所、熙朝文苑七卷、本朝忠義雜說三卷、八居題詠二卷等あり、

山口勝隆、大內義隆七世の裔、仁齋が送序あり、文集卷之一に見ゆ、

片岡宗純、柳川の人、仁齋が送序あり、文集卷之一に見ゆ、

釋道香、豐州中津の人、貞享年中京師に來たりて、仁齋に從學し、深く其學行を信ず、謂ふ學者佛氏の說に通せざれば、先儒の說の佛氏より出づるを識ること能はずと、仁齋が送序あり、文集卷之一に見ゆ、東涯亦送

序を作る、文集卷之一に見ゆ、

村上生、名字詳ならず、肥州の人、仁齋が送序あり、文集卷之一に見ゆ、東涯亦送序を作る、文集卷之一に見ゆ、

木村立、字は信甫、羽州秋田の人、聾者なり、羽人古學に嚮ふもの、皆彼れが影響による、享保十四年を以て歿す、年七十餘、仁齋が送序あり、文集卷之一に見ゆ、東涯亦送序を作る、文集卷之一に見ゆ、

吉田元發、仁齋が送序あり、文集卷之一に見ゆ、

巖崎元質、仁齋が贈序あり、文集卷之一に見ゆ、

香川修德、字は太冲、修庵と號す、播州姫路の人、京師に住す著はす所、一本堂藥選あり、其事蹟は皇國名醫傳卷之中に見ゆ、

大町質、字は正淳、敦素と號す、謚して敬簡先生といふ、京師の人、享保十四年を以て家に卒す、壽七十一、東涯其墓碑銘を作る、文集卷之十三に見ゆ、

渡邊榮、字は元安、通眞子と號す、日向延岡の人、等輩中にありて勤篤を以て稱せらる、京師に住して醫を業とす、小河成章と友とし善し、後癱瘓の疾に罹りて家に廢し、享保七年を以て卒す、年五十九、東涯其墓碑銘を作る、文集卷之十三に見ゆ、

渡邊希憲、日向の人、東涯其送序を作る、文集卷之一に見ゆ、

磯野員政、字は竹嚴、彦兵衛と稱す、醫を業とす、江州の人、後、名護屋に住す、承應三年に生れ、寶永五年に卒す、享年五十五、東涯其墓碑銘を作る、文集卷之十三に見ゆ、

鳥山守道、見庵と號す、越の府中の人、小河成章と友とし善し、醫を業とす、見庵天資朴直にして苟も詭隨せず、孝義自ら將ふ、廉にして且つ儉、毀譽懷に嬰らず、誘訕、言に形はさず、正德元年を以て歿す、年四十八、著はす所三世經驗方等醫書數種あり、東涯其墓碑銘を作る、文集卷之十三に見ゆ、

伊藤貞亮、字は廣宅、木庵と號す、醫を業とす、□州角鹿の人、寛文三年を以て生れ、享保十四年を以て卒す、年六十七、東涯其墓碑銘を作る、文集卷

之十三に見ゆ、

田中親長、字は源内、東泉と號す、謚して文逸先生といふ、京都の人、强記洽覽、人の爲めに稱せらる、享保十七年疾を以て家に歿す、壽六十八、東涯其墓碑銘を作る、文集卷之十三に見ゆ、

渡會末茂、鶴溪子と號し、造酒と稱す、伊勢の人、延寶三年に生れ、享保十八年に歿す、享年五十九、著はす所、杜律評叢、鶴溪雜記、分韵詩選等あり、東涯其墓碑銘を作る、文集卷之十三に見ゆ、云く、勢州は邑里殷富、人物亦盛なり、學を嗜むの人を問へば、必ず君を以て稱首となすと、彼れが當時の名聲、推して知るべきなり、又日本詩選の作者姓名を參考せよ、

平井德健、字は春益、東川と號す、謚して安節先生といふ、濃州の人、紀藩に仕へて醫官たり、正德五年に卒す、年七十四、東涯其墓碑銘を作る、文集卷之十三に見ゆ、

緒方維文、字は宗哲、謚して謙光先生といふ、京師の人、享保七年家に病歿す、享年七十八、東涯其碣銘を作る、文集卷之十四に見ゆ、

湯河丙治、初めの名は要、字は丁甫、一の字は元綱、東軒と號す、京師の人、久留米侯に仕ふ、寶曆八年を以て歿す、壽八十一、

伊東儀、字は邦達、好義齋と號す、長門の人、初め京師に遊んで仁齋に從學す、後、其說を疑ひ、程朱の說に歸す、享保十二年江戸に歿す、年七十一、私に謚して恭節先生といふ、鳩巢好義齋を種して獨行の君子といへり

笠原龍鱗、字は魯子、通稱は玄蕃、雲溪と號す、城州西岡の人、詩を能くす、著はす所、桐葉編あり、其事蹟は近世叢語卷八に見ゆ、

松崎祐之、字は子慶、蘭谷と號す、一の號は甘白、通稱は多助、丹後の人、少きより京師にあるを以て贄を仁齋の門に執り、後、東涯と友とし善し、專はら其師說を信じ、終身遵奉して變せず、中年の後、臨池の枝を好み、尤も草隸に長ず、享保二十年を以て歿す、年六十二、著はす所本朝歷史徵二百七十二卷以外數種あり、其事蹟は先哲叢談續編卷之五に見ゆ、

並河永、字は祟永、後尙永と改む、誠所と號し、又五一居士と號す、天民の兄なり、五畿內志を著はす、後、伊豆三島に住す、東涯の贈序あり、文集卷之

二に見ゆ、又其事蹟は野史卷二百五十八及び事實文編卷□に見ゆ、鑒定便覽名家全書、日本諸家人物誌等には誠所と五一居士とを別人とし、又名字を誤讀し、其傳ふる所甚しく事實に違へり、

並河尙義、初の名は宗孝、古八と稱す、天民の弟なり、鳥居氏に仕ふ、

鶴田重定、字は閑逸、長崎の人、自稱して長溪子といふ、其事蹟は先民傳卷之下及び鑒定便覽卷二に見ゆ、

陰山元質、字淳夫、小字は源七、東門と號す、南紀の人、享保十七年歿す、年六十四、其事蹟は敎育史資料卷十二に見ゆ、

荒木田氏筠、字は春生、齋寰（大日本人名辭書に齋寰に作るは誤なり、）と號す、渡會末茂の二子、林氏を嗣ぐ、通稱は丹下、詩名あり、日本詩選の作者姓名を參考せよ、

桂川貞輔（さだすけ）、浚泉と號す、原東岳の筆疇卷之六に浚泉を論じて「至性俊蕭狷介清潔の德ある人」といへり、以て其爲人を知るべし、

林景範、字は文進、語孟字義及び童子問の跋を作る、

三重貞亮、字は新七、松庵と號す、延寶二年を以て生れ享保十九年を以て歿す、享年六十一、東涯其墓誌を作る、文集卷之十四に見ゆ、

宇都宮三的、字は文甫、圭齋と號し、一角と稱す、遯菴の子なり、享保九年を以て京師の僑舍に卒す、年四十八、東涯其墓碑銘を作る、文集卷之十三に見ゆ、

松岡玄達、字は成章、怡顏齋と號じ、恕菴と稱す、京師の人、本草家なり、家大に富む、然れども自ら奉ずる甚だ儉素にして華飾を喜ばず、其子典絹帛を穿たず、常に布袴を服す、門人乃ち絹袴を遺る、恕菴曰く、昔予仁齋の坐に侍するとき、東涯年尙ほ少、常に素綿衣を着く、今豚兒は染衣裳を着く、之れを東涯に比すれば、亦奢ならずや、而して又何ぞ此華飾物を以てせん、遂に服するを許さず、嘗て南天燭を切りて女子の笄となす、其儉素率ね此の如し、然れども唯書籍を購ふには金錢を惜まず、兩大庫を設け、一は國書を藏し、一は漢籍を藏し、以て參考に供ふ、文會雜記卷之三に云く、

松岡玄達は初め闇齋門人なり、後仁齋東涯に十四年つきて居られ

たれども、始終朱學にしてすましたると國鷲語れり、

其事蹟は近世叢語卷五、續畸人傳卷之二及び皇國名醫傳卷之中に詳なり、有名なる本草家小野蘭山、恕菴が門に出づ、

荒木重篤、原泉と號す、天資豪宕、生産を事とせず、晩年醫を業とす、延寳元年京師火災あるに當りて仁齋古義一部を携へて逃る、原泉諸人に率先し、眉尖刀を挾み、護衛して行く、

辻達、晩菴と號す、因州の人、

大石良雄、赤穗四十七士の一人なり、彼れ嘗て贄を仁齋に取り、一日來たりて其書を講ずるに侍ず、時々睡りて聽かず、衆皆笑を匿くす、彼れ退いて後、衆皆罵りて曰く、惰懶彼れが如き學ばざるに如かずと、仁齋曰く、小子妄に謗ること勿れ、予を以て彼れを觀るに庸器にあらず、必ず能く大事に堪へん、

小野寺秀和、字は重内、亦赤穗四十七士の一人なり、

中島源造、名は正辰、もと松平紀伊守の醫者の子なり、後、大津にありて仁齋學を講ず、文會雜記卷之三上に見ゆ、

稲生宜義、字は彰信、若水と號す、姓は稲生氏自ら修めて稲となし、稲若水と稱せり、博物の名あり、著はす所、庶物類纂一千卷あり、加州侯に仕へて終はる、事は皇國名醫傳卷之中に見ゆ、

江田謙齋、東涯其贈序を作る、文集卷之一に見ゆ、

長澤粹庵、同上、

以上仁齋門人中殊に注意すべき者のみを擧ぐ、其他先游傳に載する所少しとせず、又紹述先生文集卷之二十一に謝諸友壽家君七袠の詩あり、其序に仁齋が門人三十九名を擧ぐ、併せ考ふべし、

第十　仁齋關係書類

先府君古學先生行狀伊藤長胤撰

古學先生伊藤君碣銘北村可昌撰

右二篇共に古學先生文集の初めに掲載せり、

仁齋伊藤先生傳板倉勝明撰○甘雨亭叢書仁齋日札の首に附す、

古義堂遺書總目叙釋一卷寫本○伊藤善韶著

此書は仁齋東涯の著書を悉く列記し、最後に東涯の年譜を附載するものにて、卷首には、東所の序あり、明和六年の撰に係る、

古學先生碣銘行狀一卷

此書は仁齋の門人林義端が寶永四年を以て刊行する所に係る、北村可昌の古學碣銘、東涯の古學行狀及び其他寄贈祭輓の詩文數篇を收載せり、

先游傳一卷寫本○伊藤東涯著

先哲叢談（卷之四）原念齋著

日本儒林譚（卷上）同上

先哲像傳（卷二）原德齋著

先達遺事稲葉正信著

近世叢語（卷四）角田九華著

閑散餘錄（卷之下）南川維遷著

近世大儒列傳（上卷）内藤樂聚著

古今諸家人物志釋萬菴著

日本諸家人物誌南山道人纂述

斯文源流河口靜齋著

學問源流那波魯堂著

文會雜記湯淺常山著

年山紀聞（卷五）安藤年山著

一本堂藥選（跋）香川修庵著

二連異稱一卷　藤田一正著
大日本史料原稿一卷
藝苑叢話〔上卷〕山縣篤藏編著
名儒傳寫本○著者未詳
名家全書〔卷一〕
鑒定便覽〔卷二〕
近世名家著述目錄〔卷之一〕
慶長以來諸家著述目錄〔卷上〕
日本名家人名詳傳〔卷之上〕
伊藤仁齋一卷〔偉人史叢卷三〕竹內松洲著
伊物二氏の學案島田重禮○哲學雜誌第八十八號及び第九十三號にあり、
近世德育史傳足立栗園著
日本哲學思想之發達〔獨文〕井上哲次郎著
適從錄大高坂芝山著

古學辨疑二卷富永沧浪著
菰園隨筆三卷物徂徠著
梧窓客談二卷山內退齋著
本朝異學問答一卷獨人名闕
大學定本釋義二卷伊藤東涯著
中庸發揮標注同上
童子問標釋二卷同上
語孟字義標注二卷同上
辨伊藤仁齋送浮屠道香師序一卷佐藤直方著
日本詩史〔卷之三〕江邨北海著
野史〔卷二百五十七〕飯田忠彥著
問合早學問〔卷之上〕
大日本人名辭書
文學偉人傳服部喜太郎編輯

非凡人物列傳　渡邊修二郎撰
日本哲學要論　有馬祐政著
仁齋徂徠學術の同異　内藤耻叟○東洋哲學第三編第二號にあり、
伊藤仁齋と吳蘇原　安井小太郎○東亞學會雜誌第一編第五號にあり、
仁齋學の話　三島毅○學士會院雜誌第十八編の八にあり、
日本倫理史稿　湯本武比古、石川岩吉共編

第十一　仁齋學派即ち堀川學派

仁齋一たび一家の學を主張してより其徒翕然として起り、遂に一學派を成せり、是れを仁齋學派となす、或は之れを古義學派といひ、徂徠の復古學派と區別せり、或は又仁齋が京師の堀河に住せしを以て堀河學派ともいふ、伊藤氏系圖に示し置けるが如く、仁齋に五男あり、曰く、長胤、字は原藏、曰く、長英、字は重藏、曰く、長衡、字は正藏、曰く、長準、字は平藏、曰く、長堅、字は才藏、是れなり、是れを伊藤の五藏といふ、就中原藏と才藏、即ち東涯と蘭嶋、最も著名なり、是れを伊藤の首尾藏といふ、然れども仁齋の學を大成したるは、東涯其人なり、東涯蚤に敎を家庭に受け、博學洽聞、仁齋死後愈〻家學を主張して起り、著書身に等しく、門生亦乏しからず、其勢力の盛なる、優に護園學派と頡頏するに足れり、東涯の功、豈に沒すべけんや、其詳細なることは後に改めて論ずべし、東涯以外の子孫は左に之れを列擧せん、

長英字は重藏、梅宇と號す、仁齋の第二子、東涯の異母弟なり、母は瀨崎氏、天和三年を以て生る、仁齋先きに緒方氏を娶る、緒方氏東涯を生んで蚤く沒す、故に仁齋瀨崎氏を娶れり、瀨崎氏頗る婦行あり、四男一女を生む、梅宇は其長子なり、寶永年中梅宇德山侯(周防)に筮仕す、侯深く仁齋の學を信じ、東涯を聘せんと欲す、東涯應ぜず、侯尙ほ懇請して已まざるを以て、東涯乃ち梅宇をして己れに代はらしむ、梅宇其餼廩を受くと雖も、尙ほ堀河にありて、時々德山に往來するのみ、正德元年韓使來聘す、德山侯時に館伴使なり、乃ち梅宇をして專ら文翰の事を掌らしむ、是れより先き、德山の地、文學の士、未だ多く輩出せず、梅宇此に仕ふるに及んで、經史の業に從事するもの、漸く起るといふ、享保二年の春、德山の祿を辭し、專ら生徒を敎授す、翌年に及んで、福山(備後)に筮仕し、一家を携へて此に移る、蓋し福山の地、從來皆闇齋學派のみにして、詞翰に長ぜるものなし、梅宇此に到りてより、圖國風に向ひ、曩時の陋習を一變せりといふ、梅宇避遠の地に住する實に二十八年の久しきに及ぶ、故に其學術操行を識るもの少し、惜むべしといふべし、梅宇延享二年を以て福山に沒す、時に年六十三、私に諡して紹孝(一に作る康孝)先生といふ、梅宇人となり、魁梧健談、寬厚人に接す、文、韓歐に淵し、詩、李杜に原す、常に陸務觀集を愛し、講習倦まず、經史自ら娛む、雖研考訂、老いて彌〻篤し、齋を號して相遺窩といふ、著はす所、志林二卷、談叢七卷、講學日記十二卷、相遺窩詩稿三卷、梅宇文稿五卷あり、(先哲叢談續編卷之六)

長衡、字は正藏、介亭と號す、仁齋の第三子、梅宇の同母弟なり、貞享二年を以て生まる、介亭少きより好んで字を書し、尤も行草に巧に經義の外、筆札を以て稱せられ、又繪畫を善くし、能く花卉を作る、介亭性質樸にして、粉飾を事とせず、聲譽を好まず、惟家學を研究し、之れを繼述するを以て專務となす、東涯沒するの後、其壽特に世に存するを以て、之れを推尊するもの、極めて多く、洛攝の間、人ごとに之れを欽重す、彼れ此れによりて一時聲價を荷へりといふ、享保十一年介亭四十二歲、高槻侯の聘に應じ、猶ほ京師に居る、屢、高槻(攝津)に之き、經義を講授す、侯家賓禮を以て之れ

を待し、恩遇甚だ優なり、彼れ安永元年を以て沒す、時に年八十八、私に諡して謙節先生といふ、介亭孝友の心厚し、母氏雷を怖るゝこと人に過ぐ、故に講義の半ばに雖も雷鳴あれば、堀河の本家に走れり、兄東涯に仕ふるも、猶ほ父に仕ふるがごとし、著はす所謀野危言二卷、救荒小言二卷、經濟小言四卷、謙節遺稿十二卷あり、(先哲叢談續編卷之六及び畸人傳卷之一)

長準、字は平藏、竹里と號す、仁齋の第四子、梅宇の同母弟なり、歳十四にして父を喪ひ、伯兄に撫育せられ、長ずるに及んで群書を博覽し、最も史學に長ず、享保年間父の門人湯河東軒の薦舉により禍を久留米の文學に解き、尙ほ平安に居る、後世子の侍讀に擢んでられ、江戸に移り、赤羽邸に居る、時に年三十有五、彼れ江戸に到るの後、名父の子なるを以て、其學術を信じて從遊するもの頗る多し、江戸にありて堀河學を奉崇するもの、篠崎東海之れを首唱し、湯河東軒及び竹里之れを和す、是れより先き、東涯將に江戸に遊び、關東の光を觀んとするもの、數次、竹里此に至るに及んで、詳かに風俗習氣の畿內に異なるを識る、故に絕意して到らず、竹里の赤羽邸にある、服南郭が居と僅に一小流を隔つ、南郭曾て彼れを一見して、稱して溫厚の長者となす、竹里常に謂ふ、心平に氣和すれば、溫柔と雖も、而も强毅奪ふべからざるの力あり、公を秉り正を持すれば、迂遠と雖も、而も透徹拘すべからざるの權あり、以て人物を語るべく、以て世務を言ふべし、彼れ寶曆六年を以て赤羽邸に沒す、時に年六十有五、著はす所赤羽漫筆四卷、枕干小錄二卷等あり、(同上)竹里の門人內田頑石あり、其事蹟は先哲叢談續編卷之十一に見ゆ、

長堅、名は才藏、蘭嶋と號す、仁齋の第五子、梅宇の同母弟なり、彼れ嘗て人に謂ひて曰く、

吾家兄弟八人、先人(仁齋の事)死するの日、坐食して家にあり、人或は其出費して、人の後たることを勸むれども、亡兄(東涯の事)一も省みず、與に俱に苦を啖ひ、淡を攻め、日に學行を勵み、以て似續を要す、昏頑の質、稍〻成す所あり、皆出でゝ仕に就く、女は嫁して室あり、我れを生むものは父母にして、而して我れを長じ我れを育するものは、皆亡兄なり、

其幼時の狀況以て知るべきなり、蘭嶋博學能文、父兄に類す、而して擧止端重なり、其紀州侯に仕へ、始めて君侯の前に講ずるや、書に對して講ぜず、滿座掌に汗して、おもへらく、この人寒素に生長し、未だ大人に說くに慣はず、則ち其巍々然たるを視て、然るなりと、之れを促すも應せず、侯亦之れを訝る、既にして蘭嶋、徐ろに曰く、公褥に座す、聖人の書を講すべからざるなりと、侯之れを聞き、遽に褥を去る、是に於てか、彼れはじめて講說す、音吐朗暢、辨論明備、皆歎賞して曰く、眞の儒者なりと、（先哲叢談卷之四）蘭嶋旁ら書を能くし、好んで墨蘭を作る、後、書を求むるもの多きによりて之れを斷つ、安永七年紀州に歿す、享年八十有五、著はす所詩古言十八卷、書反正十卷、（刻本一）周易本旨十二卷、易疑二卷、左傳獨斷八卷、經說叢話十卷、明詩大觀二十卷、蘭嶋雜記六卷、蘭臭篇二卷、紹衣稿四卷、紹明先生全集十二卷あり、子孫世々業を繼いで、今に至りて尙ほ紀州に存するものありといふ、蘭嶋の門人に立松東蒙あり、狂歌の祖にして著書亦頗る多し、終身娶らず、其事蹟は先哲叢談續編卷之十一に見ゆ、

東涯の子三人あり、長男を世俊といひ、二男を世倫といひ、三男を善韶といふ、世俊と世倫とは夭折す、是を以て善韶家學を繼紹せり、善韶、字は忠藏、東所と號す、文化元年を以て卒す、年七十五、謚して脩成先生といふ、著はす所古學十論一卷、本實雜論一卷等あり、東所の門人川田東岡あり、東岡名は季成、字は子行、小字は八助、東岡は其號なり、因州鳥取侯の世臣、晩に易說を研究して一家の言をなす、文化年中に歿す、年六十餘、

樋口豐撰ぶ所の脩成先生伊藤君碣銘に云く

先生諱善韶、字忠藏、號東所、伊藤氏、古學先生之孫、紹述先生之子也、妣加藤氏、先生幼而孤、敎育于季父紹明先生、旣長、孜々勵學、常以校訂遺書成就先業爲務、至晩年全畢其功、用心精密、工夫甚勤、嗟微先生、其誰能之、蓋天助云、性正直謹畏、寡言敎行、質而文、和而威、有問者、諄々善誘、其講經、言簡旨明、旁善書、寸紙世寶、搢紳之禮遇、藩國之款待、士人之景仰、皆無愧、先人、娶井口氏、繼娶新庄氏、後娶大同氏、子男七人、長弘美、繼家、次弘茂、弘義、俱夭、次弘明、次弘充、次弘光、次弘濟、女五人、所著有論孟古義抄翼、中庸發

揮抄翼、詩解、古學十論、本實雜論、文集等、享保庚戌八月二十日生、文化甲子七月二十九日終、于家、七十五、葬、于小倉山先塋之次、私謚曰、脩成先生、遺命屬門人豐譔碣銘、豐不敏、謹叙行誼萬一、係之銘、曰、似續父祖、不隕厥聲、述事卒業、集而大成、遺書永傳、斯道益明、奕世之學、千古之榮、

東所の長子を弘美といふ、弘美、字は延藏、東里と號す、文化十四年を以て歿す、時に年六十一、私に謚して恭敬先生といふ、著はす所恭敬先生文集あり、伊藤弘亨撰ぶ所の恭敬先生碣銘に云く、

君諱弘美、字延藏、號東里、姓伊藤氏、古學先生之重孫、脩成先生之長子、母靜懿孺人、井口氏也、寶暦七年丁丑三月二十三日生、娶吉益氏、不諧、終身不復娶、故無子、以季弟弘濟爲嗣、君天資溫恭、廉而且儉、不尚華侈、不好嬉弄、夙承家庭之訓、常懷倡導之志、研磨遺書、亹々不已、立誠居業、遂不墜家聲、有詩文集三卷、文化十四年丁丑五月二十四日終焉、年六十有一、葬于小倉山先塋之次、私謚曰恭敬先生、弘濟屬予誌其幽堂、因銘云、緜々瓜瓞、世々溫淳、簡重寡言、明善誠身、德不孤兮、千載有隣、

東里の男、弘濟、字は壽賀藏、古義堂を嗣いで家學を唱へ、東峯と號す、人となり溫厚謹愼、沈默寡言、天保戊寅（天保に戊寅なし、姑く疑を存す、）の冬、幕府命じて曰く、弘濟父祖五世、敎諭を以て任となす、有政の施、想ふに當に瓜瓞の綿あるべし、世の希に覩る所、其れ永く戶役を徐き、年ごとに銀を齎らして、以て積善を表せんと、弘化二年を以て歿す、享年四十七、私に謚して靖共先生といふ、（野史第二百五十七卷）藤原資善撰ぶ所の靖共先生の碣銘に云く、

先生諱弘濟、字壽賀藏、號東峯、姓伊藤氏、東所先生季子、母大同氏、嫡兄東里年老無子、以先生爲嗣、東里卒、先生實丁孝服、爲人溫厚謹愼、沈默寡言、研磨家說、校刻遺書、生徒日進、尤貴重搢紳之間、嘗屢奉鷹司殿下下問、學習所之造也、亦竊與有聞之、天保戊寅十月大府有旨曰、弘濟乃高曾祖父五世、家居以敎諭爲任、有政之施、想當有之、瓜瓞之緜、世所希覩、其永除戶役、年賚銀十五錠、以表積善之家云、寬政己未五月十九日生、弘化乙巳八月十四日罹病卒、年四十七、葬、小倉山祖先堂次、私謚曰靖共、配福井氏、六

男二女、重光嗣、家、親故門人來乞、誌其碣、因銘曰、繼志述事、學因世傳、永言孝思、宜申之年、奄忽就木、噫嘻亦天、

東峯の子、名は重光、輶齋と號し、今尚ほ家學を紹いで京師の堀川（東堀川下立賣）にあり、是れ本と仁齋邸宅のありし所なり、龜谷省軒歌あり、云く、

堀川の清き流の末とほく、今に匂へる水くきのあと、

仁齋の子孫以外殊に仁齋の學を信奉して之れを主張せしものは、中江岷山なり、岷山が事蹟學問等は後に論ぜん、仁齋が門に出て丶反りて仁齋が學を駁せしは、並河天民なり、岷山と東涯とは忠實に仁齋の學を紹述せんことを務むるに引き換へ、天民は仁齋が學の缺點を論じて憚る所なきなり、是に於てか仁齋の學派は自然二派に分れ、一派は東涯によりて代表せられ、一派は天民によりて代表せらるゝことゝなれり、先哲叢談卷六に云く、

天民唱其所獨得、以振一時、仁齋沒、其徒半從東涯、半從天民云、

此れに由りて當時の狀況を想見すべきなり、東涯、天民と其派を異にし、正派の叛徒に於けるが如き地位を占むるに拘はらず、曾て些の惡聲を出ださゞりしが如き、其襟度の宏量を窺ふに足るなり、東涯の門下亦多く人材を出だせり、澤村琴所、青木昆陽、奥田三角、山田麟嶼、安原貞平、原雙桂、原田東岳等、是れなり、其詳細なることは、東涯の條に出ださん、東涯の門人中、原雙桂の如きは、後、桂館漫筆一卷を著はし、一家の學を唱道し痛く仁齋が學を非難せり、又高志養浩といふものあり、本と東涯の門に出づと雖も、時學鍼膏二卷を著はし、仁齋が學を攻擊し、室に入り戈を操るの概あり、此の如く往々背いて起るものあるに拘はらず、仁齋學派が德川時代に於て隱然一大潮流をなしゝこと、何人も否定すること能はざるべきなり、學問源流に仁齋學派を論じて云く、

元錄の中比より寶永を經て、正德の末に至るまで、其學盛んに行はれ、世界（海内のこと）を以て是れを計らば、十分の七と云ふ程に行はれ、元和寛永の風なるは、甚だ稀なり、

是れ仁齋學の最も盛んに行はれたる時代にして、其間僅々二十年に過

ぎず、然れども仁齋の學の影響に至りては決して此に止まりしにあらず、寛政文化の頃に至るまで堀河の遺風の痕迹は、未だ全く磨滅せりと云を得ざるなり、若し夫れ間接の感化を言はば徂徠の如きも本と仁齋に刺激せられて起れるが故に、德川時代に於ける斬新なる思想の潮流は、仁齋學派によりて代表せらるといふも、決して過言にあらざるべきなり、

第二章　中江岷山

第一　事蹟

中江岷山、名は一貫字は平八、又之れを通稱に用ふ、岷山は其號なり、晩年薙髪して快安と稱す、伊賀柘植村の人、其先は志賀の源氏より出て、世、將種たりといふ、岷山幼にして書を讀むことを好む、父景次之れを奇愛し、京師に遊學し、業を仁齋の門に受けしむ、岷山乃ち夙夜孳々として往聖の微言を研鑽す、當時古義堂に來たりて業を受くるもの、或は博綜を務め、或は修辭を專らにし、才雄にして名播き、身達して業廣し、岷山之れと競はず、木訥にして文少なく、人の爲めに知られず、然れども放言自適、敢て其故態を改めず、先游傳によるに、岷山が仁齋に從學すること四十餘年の久しきに及べり、寶永中一家を携へて大阪の天滿町に移住し、其學び得たる所を以て之れを諸生に敎授す、窮乏殊に甚だし、彼れ嘗て曰く、「予れ貧窶に於ては顏憲に讓らず」と、其家道のいかん、以て想ふべきなり、

岷山平生古學を唱道し、仁齋の學說を發揮するを以て己れが任となし、力を極めて宋學を攻擊し、浸見絅齋三宅尙齋の徒と互に相敵視し、旗鼓堂々門戸相擠し、掎角の勢をなす、彼れが家は世將種なりしが彼れ自らは一變して堀河學派の驍將となり、反對派と健鬪せしもの實に痛快なりといふべし、岷山詩を以て治道に益なしとなし、絕えて詩を作らず、總べて詞章の輩を賤視せり、嘗て曰く、

聖人の大道、全く文辭にあらずして、德行にあり、故に其道、遊夏に與へずして顏曾に傳ふ、後世屈宋李杜、造道の文ありと雖も、儒者の域に入ること能はざるもの、文辭詞章の之れを羈縻するあればなり、故に余敢て歌詩を作らず、之れが爲めなり、

岷山文章を作るごとに、皆然則の二字多し、因りて書生岷山を稱して然則先生といふ、岷山亦自ら之れを認容して曰く、

首尾を通貫し、篇幅精整し、斯の若くにして而して後、快暢す、

と、蓋し然則の二字を用ふるの効用を言ふなり、岷山氣岸高亢して苟合を欲せず、塾中扁を横へて一語を書す、其文に云く

諛詞巧說不曾學習、卑禮諂態不曾操演、

享保十年十月病(即ち歿)に罹り荏苒春に至る、彼れ本と家貧にして扶持力なく、困頓殊に甚だし、六月十日に至りて遽に卒す享年七十二、城東の一心寺に葬る、東涯其墓誌銘を作る、文集卷之十四に見ゆ、銘に云く、

力扶斯文、志存塡海、其書滿屋、困窮曷悔、

岷山著はす所理氣辨論二卷、四書辨論十二卷あり、其所見を述ぶる、剖擊痛快、少しも假借せず、是れ彼れが三十年來日夕攻究して得る所なりといふ、岷山が妻、北村氏亦賢行あり、事は先哲叢談後編卷之四に詳なり、岷山が門人に野村直道あり、理氣辨論の跋を作りて曰く、

岷山先生、業を古學先生に受け、卓然傑立、其正指を洞かにす、云云、是々非々、切當明白、是に於て理氣の說亦大に備はる、

是れ必ずしも門人誇張の言にあらず、岷山明晰なる辨論と壯快なる勇氣とを以て仁齋が宇宙論を繼承し、發展し、主張することを務め、唯、蓋道

不歸一、死而不休矣」と絶叫せり、其抱負の大、以て想ふべきなり、

第二　學說

岷山は仁齋が學說を崇奉せしものなるが故に、彼れ自らの創見として紹介すべきものあるなし、然れども仁齋が學說の或る部分は彼れによりて一層明晰にせられたり、就中學者の注目すべきは、左の數點にあり、

岷山、宋儒に反し、一元氣說を唱道し、喝破して曰く、

天地の道、宇宙の間、惟一元氣のみ、動靜端なく、陰陽始なく、四時行はれ百物生る、是れ天道の全躰なり、故に人物の生、亦惟一元氣のみ、此上所謂理といふもの本と之れなし、云云、

彼れは此の如く世界の根本主義を一元氣とし、此の一元氣を活物とすること、全く仁齋の如し、其言に云く、

曰く、帝曰く、道曰く、命は皆元氣生活の意なり、

是れ帝、道、命の三者を一元に歸して同一視するものなり、彼れは又道と理との間に死活の異同あることを辨じて曰く、

道は往來を以て言ふ、其意活せり、理は條理を以て言ふ、其意死せり、故に生物には道あり、理あり、死物には理ありて道なし、

又曰く、

聖人の道、惟天道は陰陽、地道は剛柔、人道は仁義、根本根源、古往今來、生々活々、發用流行、毫髮の間斷なし、是れ酒ち道の全體、翔より末發の體なし、理とは其後萬事萬物の分別條理なり、

岷山は理は唯氣中の條理なりとし、氣以外に氣の根柢ともいふべき理あることを認容せず、其主張は畢竟理想主義に反するものなり、

仁義禮智に就いては仁齋頗る曖昧なる說をなせり、今岷山說く所によりて差、其眞意を窺ふべきに似たり、彼れ曰く、

仁義禮智は、天下の達德なり、而して性理の名にあらず、四端の心は、是れ人の性なり、以て仁義禮智に至るの端本にして、生理の端緒にあらず、

宋儒は仁義禮智を以て性となし、性を以て理となし、遂に寂靜主義に陷れり、仁齋之れと峻別せんと欲し、仁義禮智は道德の名にして性の名にあらずと主張せしも、其結論は反りて孟子の旨意と相容れざるの恐れあり、然れども岷山の如く單に性といはずして、性理といへば、宋儒の所謂性を意味し、其峻別せんと欲する所の果して那邊にあるかを知るに足るなり、即ち仁義禮智は四端を擴充して成るものにして、四端は固より人の性なり、故に仁義禮智は人の性に淵源すること、論を俟たざるなり、然れども仁義禮智を以て性理の端緒とすべきにあらず、若し性理の端緒とせば、是れ寂靜主義に向つて關門を開き、老佛と手を握りて接吻するものあり、彼れ又曰く、

道は天下の達道なり、德は天下の達德なり、性や心や、一人の固有する所道や德や、天下の通行する所、道は德の流行、德は道の功能なり、而して後に人之れを得るときは、則ち有道といひ、有德といひ、仁者といひ、智者といふなり、

仁齋一派の考にては、性と心とは、個人的にして、道と德とは、社會的なる

こと亦以て知るべきなり、岷山又朱子が四端の端を端緒の義とするを非とし、是れ端緒にあらずして、端本なりとし、遂に、

孔孟と宋儒の學と從つて分るゝ所以のもの此端緒にあり、

と論ぜり、此點に於ては仁齋一派と宋儒とは本末背反の異同あるを知るべきなり、岷山天下の事は理の一字によりて斷ずべからず、必ず人情を酌量せざるべからざることを論ぜり、其言に云く、

凡そ事專ら理によりて斷決するときは、殘忍刻薄の心勝ちて、寬容仁厚の心少なし、上の德既に非薄にして、下必ず損傷多く、人も心服せず、須らく長者の氣象ありて方に可なるべし、

又云く、

聖人の道は人情のみ、禮記凡そ三千三百、曲折詳悉、至れり盡くせり、而して後に曰く、此れ孝子の志なり、人情の實なり、禮義の經なり、天より降るにあらず、地より出づるにあらず、人情のみと是れなり、其人情を御するものは、仁義禮智なり、然れども宋儒以來仁義禮智を以て性となし、性を以て理となす、故に其仁義禮智の訓詁も亦孔孟の仁義禮智にあらずして畢竟情を滅すに至るなり、

又云く、

老佛は人情を以て惡となす、聖人は人情を以て善となし、善に順つて之れを導く、此れ乃ち聖人邪說の由りて分るゝ所以なり、夫れ人倫の立つ所以のものは人情を以てなり、人生情なきこと能はず、是を以て聖人人情に順つて以て之れを敎ふるなり、云云、天理を以て善となし、人情を以て惡となすもの、邪說の道なり、

岷山が此論、其肯綮を得たりといふべし、鄒魯の學は、理を以て道を立て、權利義務を爭はんとするにあらず、唯人情を以て其基礎となすのみ、故に寬宏仁愛の厚きありて、辭讓謙退の切なるあり、若し理を以て悉く斷ずとせんか、己れを持すること太だ堅しと雖も、人を責むること太だ深く、肺腑に浸淫し、骨髓に透徹して、卒に刻薄慘覈の流となり、聖人君子の盛德に及ばざること遠し、此の如きは古の申韓及び今の法律家の所爲

にして、鄒魯の學と相背馳するものなり、岷山曰く、

仁義禮智は、天下の達德なり、四端の心は、是れ人の性なり、人性情慾なきこと能はず、故に聖人は情欲を惡まず、但、仁義を以て準則となす、既に仁義なるときは、情欲即ち仁義なり、仁義に違ふときは、之れを利欲貪暴盜賊穿踰といふなり、

是れ情欲は殄滅すべきものにあらず、唯、仁義に合せしむべきを論ずるものにて、老佛に對し、儒教の長處を發揮し得たりといふべし、岷山又四書辨論の序に道を論じて曰く、

夫れ道とは天下の公にして、一人の私する所にあらず、翅、是を求めて是に歸するのみ、

又曰く、

萬物各、主あり、吾有にあらざれば、取ることなし、惟、此公道之れを取るに禁ずることなし、故に仁に當りては師に讓らず、一たび千古の誤りを洗ひ、永く萬世の法を立つ、斯れ古人の志なり、

彼れが道を以て自ら任ずるの氣象、軒昂一番殆んど其師に讓らざるの概あるを知るべきなり、

伊藤東涯之肖像

第三章　伊藤東涯

第一　事蹟

仁齋死後最も忠實に彼れが學術を繼承し、護園學派に對して隱然一敵國の勢を成すものを伊藤東涯（涯一に厓に作る）となす、東涯は仁齋の長子なり、名は長胤、字は元藏（元一に原に作る）東涯は其號なり、蓋し其居、堀川の東涯にあり、因りて自ら號とす、又愷々齋と號す、諡して紹述先生といふ、秦武鄕聞書に云く、

此仁齋翁妻姙娠の時、每夜々々先生孝經幷に聖經賢傳の佳書等を讀みては、是れを講讀し聞かせ給ひしとかや、されば生れし子東涯先生にして、博識の君子、世以て知る所なり、此胎敎も、是れも人の語りしを感じて記す

東涯幼少にして家庭の敎育を受け、長じて博覽强記、家學を主張するを以て任となし、爵として一大家を成せり、藤原常雅公撰ぶ所の紹述先生

碣銘に云く、

沈靜寡默恭儉謹愼、口人の過を言はず、表襮を事とせず、防畛を設けず、終身仕へず、家に講學す、經義を剖析すること、蠶絲牛毛、然れども未だ嘗て强ひて以て人に語らず、而して就いて問ふもの、日に衆く、遠近之れを尊ぶ、他の嗜好なく、祈寒暑雨、未だ嘗て手卷を釋たず、云云、

東涯の變化なき、波瀾なき生活は殆んど此の數十言によりて寫し盡くされたりといふも不可なきが如し、殊に「沈靜寡默恭儉謹愼」の八字、東涯の人物を形容して復た餘蘊なしといふべし、東涯曾て紀伊公より五百石を以て召されたれども、辭して仕へず、仁齋と同じく終身民間にありて講學に從事せり、曾て吾廬の作あり、云く、

屏顏壯帝居、風景似環滁、煙火十萬井、當中著吾廬、吾廬尤湫隘、閑門枕清渠、兩岸有人家、相距九軌餘、崖下深尋許、土沃近沮洳、旋闢丈來地、爲栽數科蔬、陽烏既斂翅、涼吹颯吾裾、時有三二友、惠來趣晏如、談中無他說、多及詩與書、少焉星彩收、氷輪走大虛、方牀逐清光、命僕移且舁、艸間虫聲起、葉底露

華疎、談罷、衣袂濕、相揖、說歸歟、客去興未盡、倚筇暫躊躇、

先哲叢談卷之四に云く、

東涯の時、俊傑輩出、各旗幟を竪て、以て自ら一方に振ふ、而して紹述文集二十卷、一言も之れに及ぶものあらず、識者以て難しとなす、

是れ彼れが謙讓爭はざるの性然らしむる所なり、彼れ貝原益軒の仁齋と、意見の合はざるを知ると雖も、題貝原翁及妻某氏字帖てふ文に云く、

嗚呼損軒子の書、蹟好度あり、老いて衰えず、某氏孟光の賢を躬にして、衛氏の筆を兼ぬ、云云、

毫も反情の痕迹を發見すること能はず、又並河天民は仁齋の門に出て、痛く仁齋が說を攻擊せし人なり、然れども曾て其病餘の作を次して云く、

夜來一雨洗塵寰、蕉葛凄其毛骨寒、行藥君今有奇策、些涼放秋問青山、

閑顧方趾滿區寰、唯解附炎與棄寒、才器如君須自惜、前程事業重丘山、

其襟度宏量、以て知るべきにあらずや、殊に當時物徂徠の如きは旗鼓堂々門戶を張り、仁齋を打擊して、以て己れが見地を立つるに急なり、然れども東涯之れを知りて殆んど知らざる者の如し、先哲叢談卷四に云く、

東涯、徂徠と時を同うし、各東西に鳴る、而して徂徠、每に東涯を藏否して置かず、或は西より至る者に遇へば、即ち首めに叩くに東涯の所業を以てす、東涯は此れに異なり、菅鱗嶋至りし日、徂徠己れを贈るの序を出だして以て之れを見す、鱗嶋出づ、東涯曰く、物氏の文は譬へば猶ほ鬼臉を蒙りて孩兒を恐喝する者の如しと、奥田三角多年東涯に親炙するも、其徂徠を評隲するを聞くは、唯此一言のみ、（此事又閑散餘錄卷之下に出づ）

又云く、

弟子嘗つて徂徠の天狗說を持し來りて東涯に眎す、時に北村可昌、松岡玄達坐にあり、同じく觀て口を極めて之れを刺譏す、而して東涯喑として一言を容れず、二生曰く、此文啻に語を成さゞるのみにあらず、而して說も亦通せずといふべし、先生以て如何となすと、東涯曰く、いな、人各見るあり、何ぞ輕しく之を駁せん、況や其天狗の狀を形容する

もの盡くせり、今の筆を取るもの恐くは及ばざらん」と、二生大に愧づ、

（此事文會雜記卷之三下に出づ）

東涯未だ必ずしも徂徠を尊崇せずと雖も、亦必ずしも之れを輕侮せず、冷々淡々、彼れが爲めに動搖せられざること、猶ほ岩石の狂瀾怒濤中に嶋起するがごとし、是れ本と自家の主義本領ありて、内に堅固なる信念を抱くにあらざるよりは能はざる所なり、若し東涯を以て仁齋に比すれば、頗る其相違あるを知るべし、仁齋は識見超邁にして、自ら創業の才たり、東涯は識見逈に仁齋に及ばずして、博學の點に於ては確に仁齋を恕して上ぼれり、東涯は仁齋の學說を紹述すべき地位に居りて恰も之れに適せること、殆んど先天的に規畫せられたる者の如し、文會雜記卷之一上に云く、

東涯は學問は仁齋に倍せり、名物六帖など只ぬき書とのみ心得べからず、譯をつけたる處、殊の外に心を用ひたる物なり、中々及びがたき篤き學問なり、制度通など隨分文獻通考、杜氏通典、明會典などを能くよみてとくと呑込んで仕立てたる物なり、大抵に書を精密に見たるばかりにてならぬ事なりと、南郭語りたまひき、

服部南郭は殊に深く東涯の篤學に感服したりと見え、「東涯の學問の如きあつきは、決して此已後もあるべからず」と云へり、是れ固より彼れが過言の甚しきものなれども、亦以て東涯がいかに當時の學術界に重きをなしたるかを察知すべきなり、萩原善詔、東涯の事を記して曰く、

或る人、伊藤東涯が所に往き、史記を五遍反復して讀みしなれども、未だ解せざること多しといへり、東涯對へて、吾子の解し得ざるは其筈のことなり、余は二十一遍讀みしなれども、未だ解せぬことありといはれたり、紹述先生の勉强精密、實に驚歎すべきことなり、云云、

此れに由りて之れを觀れば、東涯は中々に精讀を勉めたる人なり、此點に於ては何人も敬意を表するに躊躇せざるべし、然れども彼れが謙讓と篤學との爲めに、餘りに彼れが人物を過大にするを休よ、彼れは才識に乏しくして、是れといふべき創見もなく、寧ろ一意退嬰、家學を紹述せ

る一大儒に過ぎざるなり、決して天空海濶の氣象ありて震天動地の業を經營する豪傑の徒にあらざるなり、故に彼れの著書を讀めば、直に睡魔に襲はるゝの感あり、是れ毫も愉絶快絶覺えず案を拍つが如き情的の聲貌に接すること能はざるが爲めなり、拙堂文話卷一に云く、

東涯之文少疵然氣餒不及讀之思臥古人謂文以氣爲主信然、

拙堂が此評、其肯綮を得たりといふべし、東涯の議論も亦其文章と同じく平穏にして疵瑕少なしと雖も、氣餒沈滯して空も揚らず、故に讀者をして忽ち倦厭せしむ、文會雜記卷之二上に云く、

東涯の文とかくはきとしたる文なし、經史博論もひとつも面白しきことなしと云へり、

東涯本と人目を醒すべき壯快なる思想なし、故に其文多しと雖も、はきとしたるものとては殆んど見出だすこと能はざるなり、詩も多くは平凡にして朗吟に耐へず、然れども時に佳作なきにあらず、今左に數首を擧げんに、

秋郊閑望

一村桑柘暗、千畝稻粱肥、藍水流紅日、白雲住翠微、世途榮願薄、今古賞音稀、尙愧機心在、山禽驚却飛、

月下聞砧

寒杵丁當響、擣殘月滿天、只聞來枕上、不識自何邊、

贈塾中諸子

離鄕迢遞滯京城、泮水相逢皆弟兄、喜子前程期遠到、螢窓殘夜聽書聲、

島童生

誰甘草木與同腐、莫使鳳鱗爲獨奇、聞說分陰重尺璧、朱顏幾日鬢絲々、

送大村景尹東遊

六經千里志、一劒十年光、天外波濤白、愁邊艸木黃、古來有窮達、男子愼行藏、吾道要扶起、差令人意强、

江邨北海が日本詩史卷之三に東涯の詩を論じて云く、

其經義文章の如きは、姑く是れを舍く、詩も亦一時の鉅匠なり、近人動

もすれば輙ち曰く、東涯の詩、冗にして法なく、率にして格なしと、噫談何ぞ容易なる、東涯篇章最も饒し、余其集を閲するに、潤麗なるものあり、素朴なるものあり、精嚴工整なるものあり、平易淺近なるものあり、體段齊くし難し、余生れて時に後るゝと雖も、猶ほ東涯を知るに及ぶ、其人溫厚謙抑、口訥々として言ふ能はざるものに似たり、今時の學者自ら龍門に託し、倨傲名を養ひ、懶惰禮を失ふものと同じからざるなり、人詩を乞ふものあれば、則ち貴賤長少を論ずるなく、黽勉之れに應ず、大名の下、乞ふもの日に衆し、所謂卷軸の積むこと東筍の如きものなり、是を以て其作る所鍛錬を經るあり、率意に出づるあり、畢竟大家たるを害するなし、

北海此の如く東涯の詩を稱揚すれども、一首だも擧げず、蓋し深く其德に服するの極、此言をなすに至るものならん、那波魯堂が學問源流に東涯を論じて「詩は力なく、味少なし」といふもの反りて當れりといふべし、然れども東涯は規模廣大にして造詣亦淺からず、詩文の作家としても、決して侮るべきにあらず、板倉勝明曰く、

先生篤學實行を以て自ら任ず、詩文は則ち其緒餘のみ、余を以て之れを觀るに、其詩文專門名家と雖も、殆んど及ぶ能はざるものあり、蓋し內に蘊して外に溢す、所謂德あるもの、必ず言あるものか、云云、

又近世叢語卷之四に云く、

東涯名敎を以て自ら任ず、詩文は其餘事なり、而して亦一時の鉅匠たり、文は唐宋大家を學び縝密精整、浮躁の態なし、猶ほ其人のごときなり、詩は門戶を堅持せず、其多きを以て應ずる所、其躰一ならず、夫の當時李王を尸視するものに視ふれば、一種の滋味ありといふ、

是れ亦一說なり、但氣魄光燄の足らざるを見るのみ、東涯は講義も亦低聲にして門人之れを聞取するに苦みしといふ

東涯著述極めて多く、貝原益軒、新井白石等と伯仲の間にあり、閑散餘錄には「近世諸儒の中著述の多きは東涯に若くはなかるべし」と云へり、是れ固より、過言なり、然れども著書等身とは東涯の如き人をこそ言ふべ

けれ、閑散餘錄には、「凡そ既に刊せると未だ刊せざると合せて四十餘部百六十四餘卷あり」と云へるも、其實之れより多く、著書總計五十三部二百四十二卷及び圖三舖あり、此れに由りて之を觀れば、其爵として一大家を成せるを知るべきなり、平維章が東海談上編に云く

或る國君當世の名人を問ふ、答へて曰く、儒者は伊藤源藏荻生惣右衛門、曆算は中根丈右衛門、久留島喜內、殊に丈右衛門は曆算のみにあらず、多藝の人なり、笙道は細井次郎大夫、官位裝束は壺井安右衛門、神道は賀茂の梨木氏、俳諧は松本次郎右衛門、くだりて戲臺狂言は市川團十郎、

思ふに仁齋死後、江戸に徂徠あり、京都に東涯あり、何れも學界の重鎭として東峰西嶽、遙に相對立して、當時一奇觀を呈せり、太田錦城が九經談卷之一に云く、

東涯先生博雅多識、當時比なし、其著作する所、皆有用の書なり、經義は宋學を辨駁し、十に七八を得たり、唯其家學を推衍するもの多くは醇正ならず、然れども之れを要するに學問の博、著述の富、我邦儒先の第一たり、

猪飼敬所又之れを評して曰く、

東涯の人となり、溫厚にして物と競はず、博學多識、其見亦固陋ならず、但宋儒を攻め家學を張るに意あり、故に區々として堅白を爭ひ、往々小辨の義を破るものあり、是れ其醇正ならざるの謗を受くる所以なり、

東涯は自ら孝子と稱する程、仁齋に對して深く敬愛の意を表せるが故に、寸毫も仁齋の學說に違ふこと能はず、終身唯孜々として仁齋の學說を敷衍するのみ、是を以て仁齋の偏する處に於ては、共に一方に偏し、爲めに醇正ならざる所あり、然れども東涯は本と君子人の資性ありて自然に教育家の態度を具し、世の名敎に裨補する所鮮少にあらざるなり、

先哲叢談卷之四に、

東涯經術湛深、行誼方正、粹然たる古の君子なり、

といふもの、洵に當れり、東涯平素孜々として力を講學に用ふれども、又臨池の技に長ぜり、名家手簡初集に東涯の手蹟を載す、以て其一般を推知すべきなり、東涯の門人に高養浩といふものあり、曾て時學鍼炳二卷を著はし、卷末に東涯の人物を論じて曰く、

溫厚の長者なり、博學洽聞、徂徐に減せず、惜いかな、性謙讓に過ぎて、智施設に乏しく、學衆美を包ねて、才教誨に短なり、是を以て問ふことあれば、之に答ふ、答も亦精詳ならず、問はざれば之れを示さず、示さゞるも亦咨むるにあらず、然して其父師の說に於けるや、罅漏を補苴し、幽渺を張皇し、筆削改竄、大勳勞ありといふべし、童子問語孟字義の二書既に已に刊行す、論孟古義は坏樸略具はりて、而して成說未だ完からず、先生門人と校讎討論、予も亦末席にあるを忝うす、今を以て之れを思ふに、論語の一書は章々句々、修爲を說くもの多し、故に仁齋の旨符合せり、抑孟子心性を論ずるに至りては、窒礙通せざるもの過半なり、故に今刊行する所の孟子古義は、其實東涯削鑛の手に成るものなり、

此れに由りて之を言ふときは、東涯の學識、未だ必ずしも其家說に異議なくんばあらず、而して孝子仁人、豈に夢寐にだも發するに忍びんや、是を以て當に知るべし、先生の篤志賢慮、他人の敢て及ぶ所にあらざるを、

東涯寛文十年四月廿八日に生まれ、元文元年七月十七日に卒す、中風の爲めなり、享年六十有七、加藤氏を娶り、男子三人あり、其中二人は夭死し獨り末子の善詔、家學を繼承して起り、堀河の流派をして緜々として絕えざらしむ、東涯座右の銘あり、以て其平生を見るべし、云く、

跬步、爾の所生を忘るべからず、一日爾の所職を曠うすべからず、所生は恩天の如し、天を忘るれば、身斯に覆る、所職は惟れ身の本、本を忽にすれば、命必ず極まる、惟れ吾言にあらず、寔に帝の則、此れを以て君に事ふるときは、忠臣たり、此れを以て人に交はるときは、德を失はず、

原東岳、自著「經說拾遺」の序に云く

昔、人言へるあり、文武の後、仲尼を生ぜざるを得ず、仲尼の後、孟軻を生

せざるを得ず、直是に於て亦云ふ、兩夫子の後、仁齋東涯二先生を生ぜざるを得ず、夫れ孔聖沒して後、孟夫子あり、孟夫子沒して後、天下道なく、賢々焉たり數千歳にして二先生出で、毅然として道を以て自ら任じ、不傳を遺經に續いで獨り之れを發明し、上は堯舜禹湯文武より以て孔孟に至るまでの精微を極め、下は陰陽事物神仙怪誕の如き一切して、これを正に歸せざるはなし、以て千歳の惑を破るあり、設し二先生なかつせば、則ち道卒に喪び、言卒に湮せん、而して數千百歳の間、華既に其人なうして、而して孔孟の適派、邈として吾日東に傳みる則ち昭代文獻の隆なる、茲に於て徴すべし、

此れに由りて之れを觀れば、當時堀川派の仁齋東涯を尊崇すること、殆んど孔孟に讓ちざるが如きものありしを想見すべきなり、

第二　著書

辨疑錄四卷

此書は東涯が三十九歳の時に編著せるものにて、其後二十餘年を經て、享保十八年に至り、始めて上梓する所なり、首めに東涯の題辭あり、云く、

學爲さゞれば則ち已む、爲さば則ち當に聖賢の學を爲すべし、聖賢の學を爲さば則ち當に聖賢の書を讀むべし、聖賢已に往いて、言岐に旨隱る、過高過緊、學復た古ならず、先君子沉潛の識を躬し、獨得の見を奮ひ、一片の婆心、和盤托出、微言精義、餘なしと雖も、而も初學晩進、尚ほ或は問を煩はす、因りて舊聞を叙て、參るに新得を以てし、筆して辨疑錄四卷となし、以て答問の資となす、

卷末に小貫徽典の跋あり、先哲叢談卷之四に、

或は曰く、東涯の辨疑錄、貝原益軒が大疑錄に答へて之れを作ると、

此言然らず一に仁齋の遺漏を拾ふて、以て家說を主張するのみ、云云、

益軒の大疑錄は仁齋を駁せしものにあらず、故に東涯之れに答ふべき謂はれなし、且つ大疑錄は正德四年に成りしものにて辨疑錄より後れたり、以て兩者の間、毫も關係なきを知るべきなり、

古學指要二卷

此書は仁齋死後十年にして成るもの、辨疑錄と同じく家學を敷衍せるものなり、

學問關健一卷

此書は國字を以て家學の大意を叙述せるものにて、東涯の死せる翌年卽ち元文二年を以て發行せり、其中論じて云く、

畢竟道と云ふものは、卽事卽道、人々行事の上にありて、吾身を離れて、一物の見るべきものあらんや、

又云く、

又之れを將來に試みるに、却後千百年にして假令ひ聖人ありて出現し、玉ふといふとも、此孝弟の道をあしいとせざること、決焉として知るべし、

首めに菅原家長の序あり、云く、

其存日嘗て此書を梓するを命ず、未だ成らずして沒す、

終りに奧田士亨が跋あり、云く、

嗚呼此書最も晩出に系る、寔に忽にすべからず、苟も其門を得て入らんと欲するもの、關鍵に由らずして可ならんや、

此書蓋し享保十五年の著作に係る、故に士亨以て最も晩出とするなり、

天命或問一卷寫本

此書は寶永三年の著作に係る、序跋なし、

復性辨一卷

此書復性說を駁せる三篇の文章を輯めて、一卷となせるものにて、卷

末に平維章の跋あり、享保十五年の上木に係る、

古今學變三卷

此書は古今學問の變遷を論ぜるものにて、奥田士亨が蘭嶋と共に相謀りて校刻する所、卷末に「寛延三庚午新刊」とあり、首めに東涯の序あり、云く、

三代聖人の道、變じて今日の學となる、其由來する所のもの漸なり、豈に唯一朝一夕の故ならんや、漢に一變し、宋に再變し、千有餘歳の間に潛移默奪して、以て今日に至る、而して今日の學、復た古の學と同じからず、云云、

是れ亦東涯が家學の歴史的地位を明かにせんが爲めに著はす所にして、享保七年を以て脫稿せり、

經史論苑一卷

此書初めに善部の序あり、終りに奥田士彦の跋あり、古義堂遺書總目叙釋に云く、

治經八論品士四科等の雜文を輯めて、以て閒居筆錄の後に載す、甲寅の歳、選んで集中に散載す、後、舊に復し、又分ちて以て一部となし、未だ號を立てず、只篇首の文を題し、名づけて治經八論といふ、詔今改めて經史論苑と名づく、云云、

以て此書の由來を知るべきなり、

經學文衡三卷

此書宋元明諸儒の經義に關する文十八篇を收載せるものにて、享保十九年の刊行に係る、首めに伊藤介亭の序あり、

經史博論四卷

此書は東涯が經史に關する文章六十餘篇を收載せるものにて、實永七年を以て脫稿せり、卷末に原田邦直の跋あり、蓋し元文二年の刊行に係る、

訓幼字義八卷

此書は國字の書にして、東涯が享保二年を以て作爲する所に係る、首